県道府中・琴南線改良工事に伴う

備中地遺跡発掘調査報告書

—付・中寺廃寺確認調査概報—

1988.2

琴南町教育委員会

中寺廃寺跡及び備中地遺跡発掘調査に寄せて

郷土の歴史をたずね，先人の残した貴重な文化遺産に学び，豊かなふるさとを創造し，正しく後世に伝えることは，現代に生きるものの責務であると思います。

このたび，中寺にまつわる伝承を手がかりに，県教委元文化行政課主幹松本豊胤，県文化財保護協会理事大林英雄・川畑迪氏の指導のもと，昭和56年11月９日及び昭和57年４月５日の２回の現地探索により，その遺構らしきものを発見，県教委の指導のもとその発掘調査を，昭和59年４月18日から５月15日の間，実施したのであります。

中寺廃寺跡は「讃岐廻遊記」など寺名が見られるだけで記録はなく，ほとんど伝承でただ「中寺」とか「松地（松寺）」「鐘が窪」などという地名に残っているに過ぎませんでしたが，今回の調査によって，単なる伝承でなく，確かな寺跡として実証されたもので，他に類似数少ない中世の山岳寺院の形態を，明らかにすることとなりました。

また，備中地遺跡は，昭和28年４月21日備中地集落において，煙草乾燥場を建てるために基礎工事していたところ，偶然にも弥生式の土器が発掘され，以後その周辺で弥生式系の土器小破片が出土採取されており，県教委による試掘調査も行われたところであります。折しも昭和60年度県道府中琴南線拡張工事に先立ち，香川県善通寺土木事務所の依頼を受け，昭和60年11月18～19日，県教委文化行政課中西技師による再度の試掘調査が行われ，その結果，良好なる弥生式土器包含層を検出することができ，更に昭和61年９月16日から10月13日までの15日間調査が行われ，予想外の多数の遺物を発掘されたのであります。今回の発掘調査は，小規模で，その全容を知ることはできませんが，本町の歴史に新しい１ページを加えることができました。

最後になりましたが，今回の発掘調査に当たり，直接終始熱心にご指導賜りました香川県教育委員会文化行政課中西昇先生はじめ，ご協力いただきました関係者各位に深く感謝し厚くお礼申し上げます。

この小冊子が埋蔵文化財とりわけ中寺廃寺跡・備中地遺跡について関心と理解に少しでも役立つことができれば幸いであります。

昭和63年２月１日

琴南町教育委員会 教育長　高　尾　和　正

例　　言

1．本書は，昭和61年度に実施した県道府中・琴南線改良工事に伴う備中地遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，香川県善通寺土木事務所から委託されて琴南町教育委員会が調査主体となり，香川県教育委員会の職員の派遣を得て実施した。

調査組織は下記のとおりである。

調査担当　香川県教育委員会文化行政課
　　主任技師　　中　西　　昇
事 務 局　琴南町教育委員会事務局
　　教 育 長　　高　尾　和　正
　　課　　長　　山　下　光　男
　　派遣社教主事　金　岡　邦　夫（転出）
　　主任主事　　黒　川　永二郎

発掘作業協力者

小笠原国正，川田貞美，谷森和夫，平田重一，門谷美音子，谷森キミ子，谷本登美子，谷森イサエ，里坊ハツエ，伊賀ミツノ，岡崎愛子，川田ヨシ子，中山幸子，高橋八重子

協　　力　香川県善通寺土木事務所

3．本書の執筆・編集は，中西が担当した。

4．本書に使用した遺構・遺物の実測図は現在香川県埋蔵文化財センター，出土遺物は琴南町教育委員会において保管している。

5．なお，調査の全般にわたって，下記の方々の御指導・御教示をいただいた。記して感謝いたします。

伊賀正法，大林英雄，香川県教育委員会文化行政課職員　（敬称略）

目　　次

第１章　立地と歴史的環境…… 1
第２章　調査に至る経緯と調査の経過…… 5
第３章　調査の概要…… 7
　1　ＳＤ01…… 7
　2　ＳＸ01……15
　3　ＳＤ02……16
　4　包含層の遺物……17
　5　遺構下包含層の遺物……17
　6　その他の遺物……18
第４章　まとめ……30

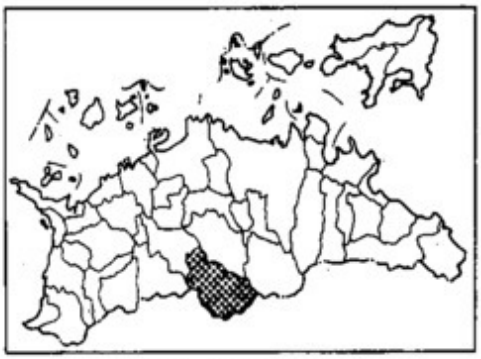
挿　図　目　次

第１図　琴南町位置図…… 1
第２図　琴南町遺跡地図…… 1
第３図　備中地遺跡周辺地形図…… 2
第４図　昭和28年出土土器実測図…… 3
第５図　発掘調査区グリッド設定図…… 6
第６図　備中地遺跡・遺構全体図…… 7
第７図　第１グリッド遺構平面図，同北壁・西壁土層図……９～10
第８図　第２グリッド遺構平面図，同北壁・西壁土層図……11～12
第９図　第３グリッド遺構平面図，同北壁・西壁土層図……13～14
第10図　ＳＤ01出土土器実測図（１）……19
第11図　ＳＤ01出土土器実測図（２）……20
第12図　ＳＤ01出土土器実測図（３）……21
第13図　ＳＤ01出土土器実測図（４）……22
第14図　ＳＤ01出土土器実測図（５）……23
第15図　ＳＸ01出土土器実測図……24
第16図　ＳＤ02出土土器実測図……24
第17図　包含層出土土器実測図（１）……25
第18図　包含層出土土器実測図（２）……26
第19図　遺構下包含層出土土器実測図……27
第20図　調査区出土石器実測図……28
第21図　調査区出土縄文土器実測図……28
第22図　中世土器実測図……29
第23図　調査区隣接地出土土器実測図……29

図 版 目 次

図版1(1) 備中地遺跡遠景……33
(2) 調査前全景……33
図版2(1) 第1グリッド全景（SD01, SX01）……34
(2) 第2グリッド全景（SD01）……34
図版3(1) 第3グリッド全景（SD02）……35
(2) 第2グリッド西壁（SD01）土層……35
図版4(1) 第3グリッド西壁土層……36
(2) 第2グリッド北壁土層……36
図版5(1) SD01（第1グリッド）土器出土状況……37
(2) SD01（第2グリッド）土器出土状況……37
図版6 第1グリッドSD01下包含層土器出土状況……38
図版7 弥生土器（1）……39
図版8 弥生土器（2）……40
図版9 弥生土器（3）……41
図版10 弥生土器（4）……42
図版11 中世土器・縄文土器・石器……43

第１章　立地と歴史的環境

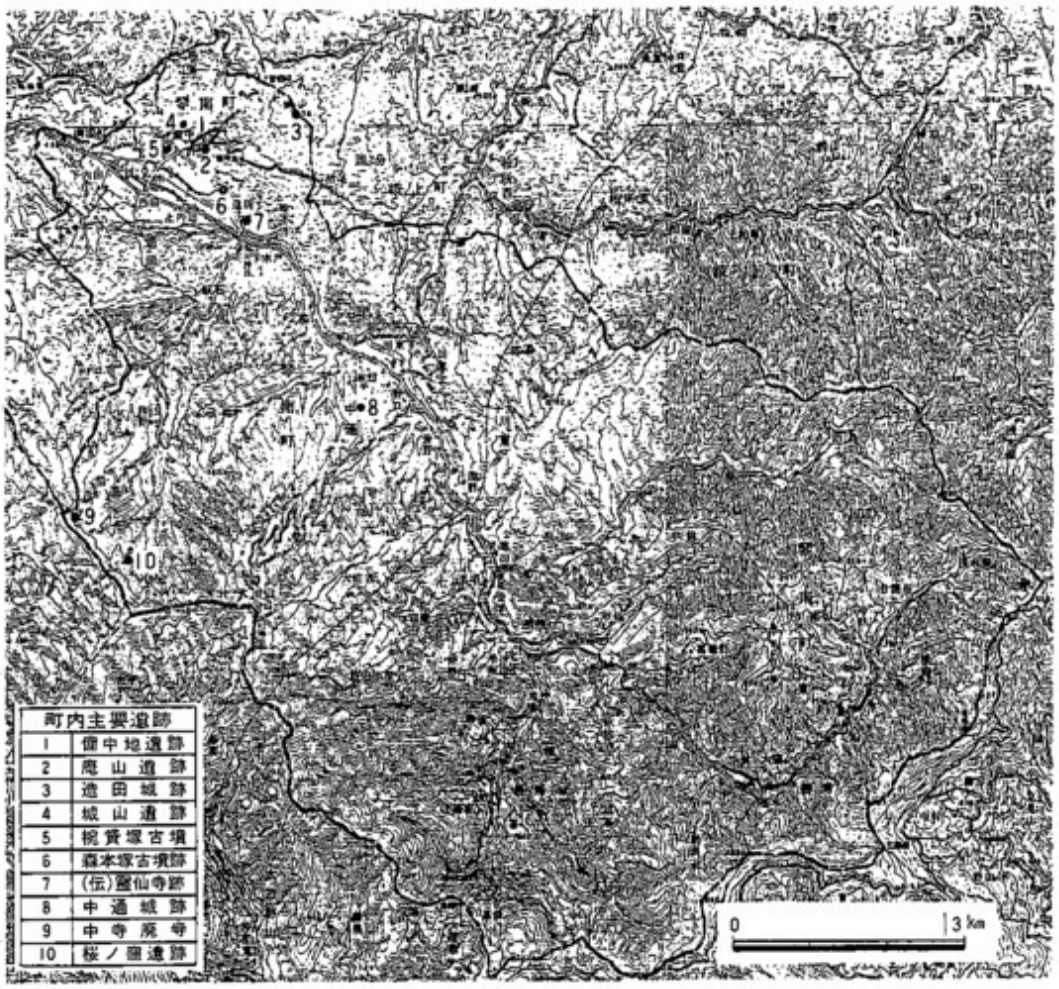


第１図　琴南町位置図

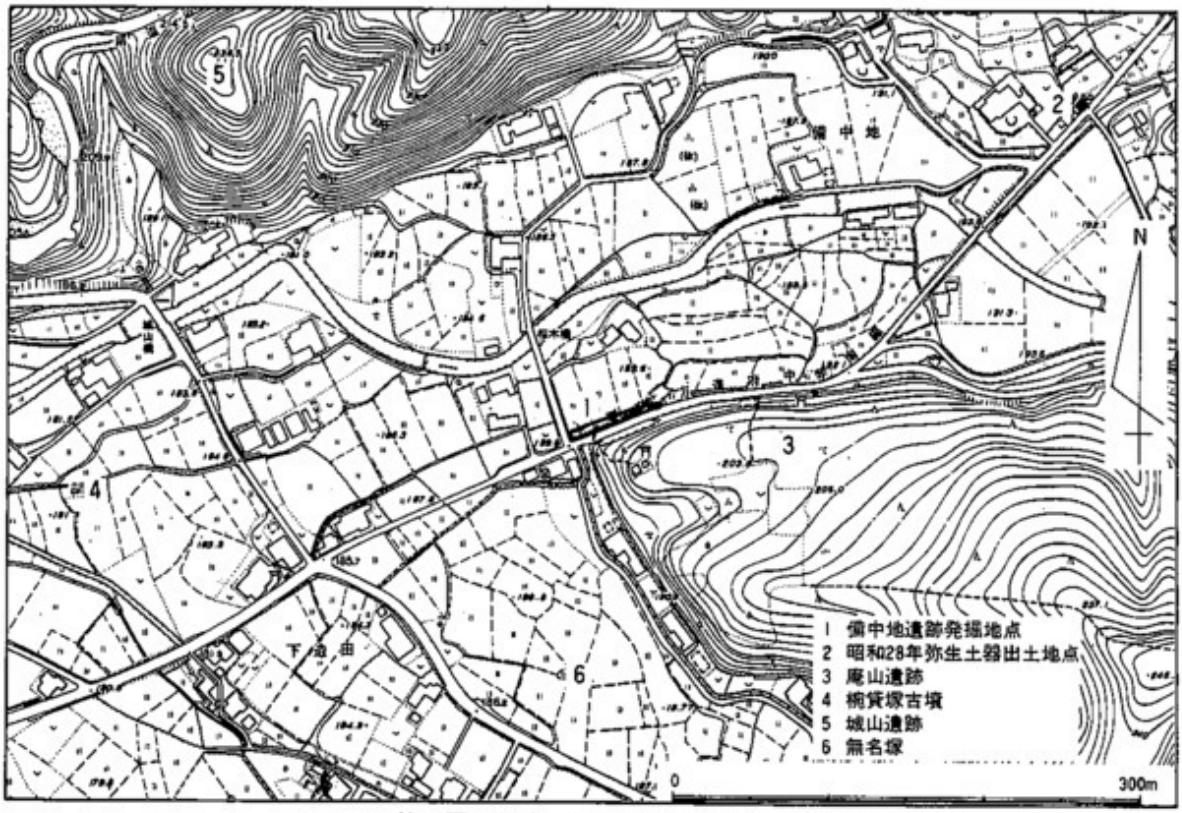
琴南町は，香川県の中央部南端に位置している。

南接する徳島県とを隔てる讃岐山脈を水源とする土器川が，北西の丸亀平野に向かって町のほぼ中央を縦断している。そのため，土器川沿いの造田盆地と中通盆地のほかは，一部台地状の平坦地を含む山岳地帯と峡谷からなる。

本遺跡は，東に隣接する綾上町猪尾奥を水源とする備中地川の，土器川に合流する造田盆地に谷が開けた字備中地の南岸河岸段丘上に立地する。その南には，土器川本流と備中地川を隔てる，焼尾台地の末端である庵山丘陵がせまり，北岸には城山山地が広がっている。



第２図　琴南町遺跡地図



第3図　備中地遺跡周辺地形図

(註1)

琴南町において，周知の遺跡として遺跡地図に収録されているものは，備中地遺跡のみである。これは次章でも述べるが，今回の発掘調査地点の北東約350m離れている（第2図1，第3図2）地点で，昭和28年に焼草乾燥場を建設する際，弥生式土器が出土したことから発見された。偶然の機会による発見であるため，遺構・出土状況等の詳細は不明である。第4図に紹介した土器は，現在町教育委員会に保管されている。他に2個体分の破片があったということであるが，現在では散逸してしまい，所在が不明である。

この土器は表面に丁寧なハケ調整が施され，淡い橙褐色を呈する。底部は丸底に近いが，わずかに平坦面を残す。弥生時代終末期頃のものであろう。

他には，本書後半で報告するが，昭和59年度に確認調査を実施し，山岳寺院の伝承のみであった付近から，鎮壇具を伴う塔跡をはじめ，礎石が残り伽藍の一部と思われるテラス状遺構を確認した，平安中期と推察される中寺廃寺（第2図9）が新たに知られるようになった程度である。

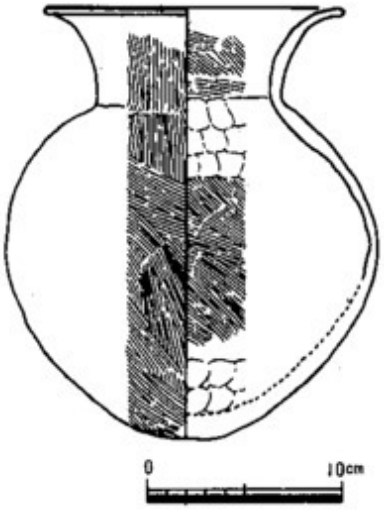
しかし，文献や伝承，町民の情報，踏査などにより新たに第2・3図に示したように幾つかの遺跡が所在することが明らかになった。

琴南町内では現在までに旧石器時代の遺物は発見されていない。縄文時代については，備中地遺跡の今回の調査で，早期の大型楕円押型文土器片が2点出土した。また，調査中に上流の備中地池や，その上流の綾歌郡綾上町の猪尾地区でかつて押型文土器が採集されたことがあるという情

報を得たことから，場所を特定できないにせよ，付近に縄文時代早期の遺跡が所在する可能性が高くなった。(註2)

弥生時代については，備中地遺跡のほかには，南に隣接する庵山遺跡（第３図３）で蛤刃石斧が採集された記録がある。(註3)また、備中地遺跡調査中に調査員が弥生土器片を採集している。

琴南町内の古墳としては，造田地区の椀貸塚古墳（第２図５）が唯一知られる。開墾により削られ，６×８ｍの方形を呈し，高さは１ｍ程度で，墳丘上面は平坦になっている。他には，備中地遺跡の南600ｍほどの町道沿いに，横穴式石室をもつ森本塚古墳が所在したが，戦後の開墾で消滅したという。



第４図　備中地遺跡出土弥生式土器

他に町内で古墳時代の遺跡は確認されていない。

古代の山岳寺院である中寺廃寺については本書中で報告しているので割愛する。

中世の遺跡としては，桜ノ窪遺跡（第２図10）で，中世前半の須恵器が散布している。(註4)標高700ｍ前後の，集落から遙かに離れた山中の緩斜面であり，遺跡の性格は不明である。他に，文献によると14世紀前半に建立されて戦国期に廃絶したと思われる霊仙寺と，中世後半に存在したと思われる西勝寺が，造田地区に廃寺として伝承されている。いずれも造田村の正保４（1647）年の内検地帳にはそれぞれの小字を残す田畑が記されているということから，17世紀前半には既に地名を残すだけになっていたようである。(註5)

戦国期の山城跡としては，中通本村の南標高375ｍほどの尾根頂部に２段の郭を残す中通城跡（第２図８）と，造田地区と綾上町とにまたがる城山（標高428ｍ）山頂部に所在する造田城跡（第２図３）があげられる。前者は新名氏，後者は造田氏の山城と言われる。今回の発掘調査地点の付近には，中屋敷，門屋，長屋などの地名や屋号が残っていて，造田氏の居館跡の可能性を窺わせる。中世の土鍋の脚部がしばしば出土しているという。なお，備中地遺跡の北側には城山と呼ばれる山があり（第２図４），頂部より南東方向に三段の郭状の平坦地が認められる。造田城と一連の遺構であろう。

以上，町内における遺跡の概略を紹介したが，数少ない遺跡の大半が最も下流の造田盆地に集中している。しかし，町内全域にわたる詳細な遺跡分布調査が実施されていないため，今後中通盆地より奥でも新たに遺跡が発見される可能性は大きいと言えよう。

註1　文化庁文化財保護部・編『全国遺跡地図　37　香川県』　1977・5

註2　綾上町教育委員会・編　『綾上町誌』1978・3　41Pに写真が掲載されている。未実見。

註3　故和田正夫氏の残した記録の中に略図が見られる。それによると全長11.7cm，幅5.7cmの青色粘板岩製とされている。現在は散逸しているという。

註4　本書後半の「中寺廃寺確認調査概報」の47ページ第2図参照。

註5　琴南町誌編纂委員会・編　『琴南町誌』　1986・11

註6　註5に同じ。

第2章　調査に至る経緯と調査の経過

備中地遺跡は，昭和28年４月21日，当時の造田村備中地地区において，煙草の乾燥場建設に伴う掘削後の整地作業中に，完形の壺形土器１点（第４図）を含む多数の弥生土器が出土したことにより発見された（第３図２の地点）。

その後，昭和59年５月に，町教育委員会が県教育委員会と共催で中寺廃寺の確認調査を実施した際，その最終日に，前述の煙草乾燥場の隣接地で２㎡のトレンチによる試掘調査を行った。この調査では２～３ｍ山寄りであるにもかかわらず，土器発見時の地表下30～40cmという面では何も出土せず，120cmほど下から摺鉢や土師質土器など中世土器の磨滅した破片が少量出土しただけであった。全体に，砂質土と砂層の互層を呈しており，遺物も流れ込みと思われる状況であった。

翌昭和60年，県道府中・琴南線の拡幅工事に先立って，香川県善通寺土木事務所の依頼を受け，11月18～19日に県教育委員会が試掘調査を実施した。前年度調査地点より50ｍほど上手から南西方向に約650ｍの区間で16箇所のトレンチを設定し，重機を使用して調査した結果，濃密な弥生土器包含層を検出した通称庵山の北西部山裾約250㎡を本調査対象地として絞り込んだ。

その結果を受けて，昭和61年善通寺土木事務所から，同年９月５日付で文化財保護法第57条３による埋蔵文化財発掘の通知が提出された。

調査にあたっては，善通寺土木事務所と琴南町教育委員会との間で発掘調査委託契約書が交され，町教育委員会が調査主体となり，県教育委員会文化行政課職員の派遣・指導を得て実施された。

調査は，昭和61年９月16日から10月13日にかけて行われた。

〈調査日誌抄〉

９月16日　杭打ち，発掘区の設定。重機により耕作土除去開始。

18日　１gr.の包含層掘り下げ開始。土器が多量に出土し始める。

24日　１gr.で溝状遺構（ＳＤ01）検出。

25日　２gr.の包含層掘り下げ開始。

26日　１gr.のＳＤ01完掘。２gr.でＳＤ01の延長を検出。

30日　２gr.のＳＤ01完掘。３gr.掘り下げ開始。ＳＤ01の延長及びもう１本の溝状遺構ＳＤ02を検出。

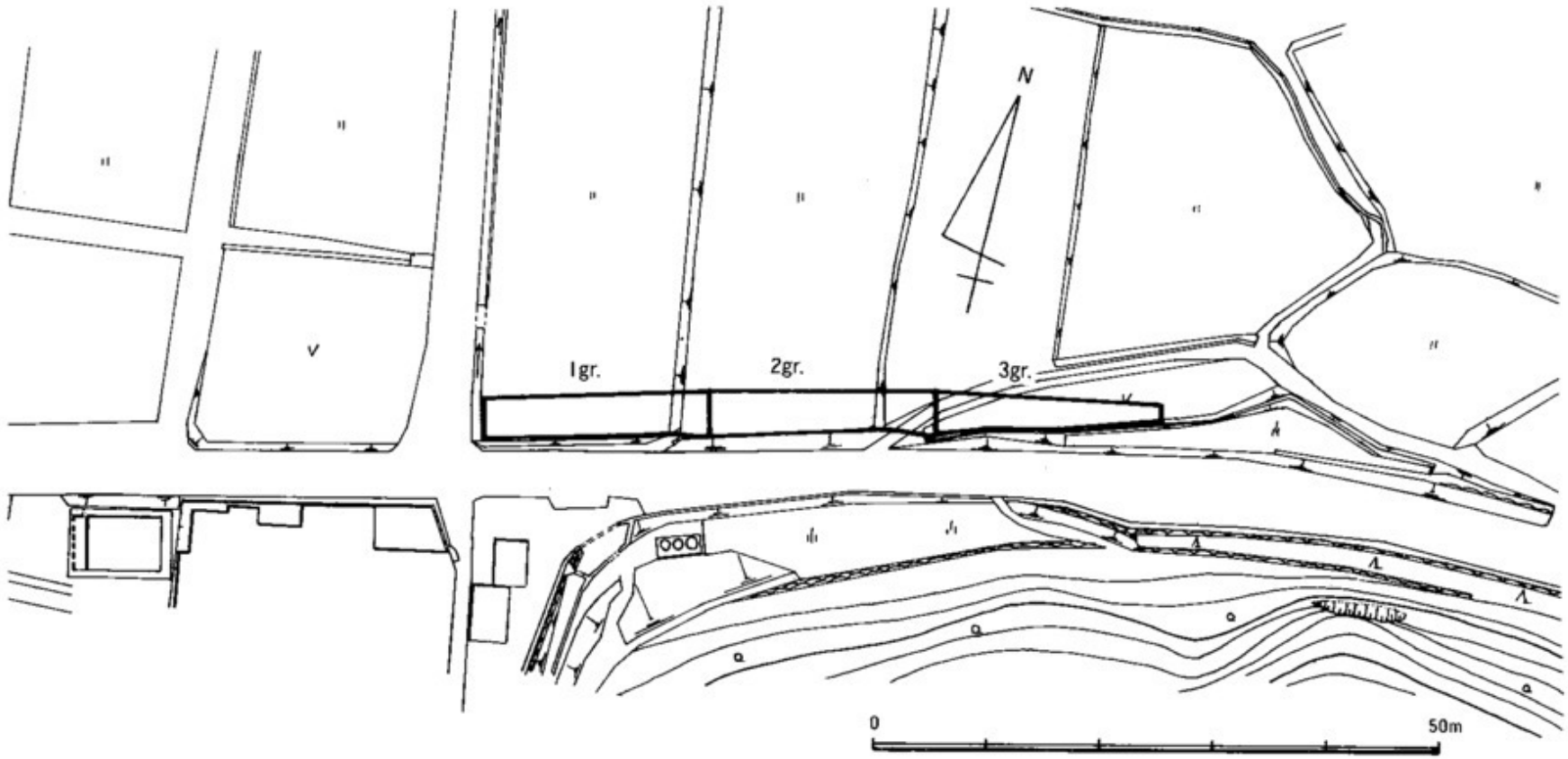
10月２日　近くの琴南西小学校５・６年生約50名が見学に来訪。

３日　３gr.完掘。１gr.遺構・土層実測終了。

７日　２～３gr.遺構・土層写真撮影。

８日　２gr.遺構・土層実測終了。遺構全景写真撮影。

13日　３gr.遺構・土層実測終了。器材撤収。



第５図　発掘調査区グリッド配置図

第3章　調査の概要（第5・6図）

調査対象地は，面積約250㎡で，現在1車線の県道を2車線に拡幅する部分に限られていた。また，幅は広い所で5m程度，大半の部分で4m前後しかない上，現道路より1～1.5mも下のため，排土搬出など延長60mの区間の調査は困難を極めた。

調査区は，東西に延びる対象地を20m毎に区切って，西から第1グリッド，第2グリッド，第3グリッドとして設定した。

重機により耕作土及び床土を除去したところで，約20～50cmの弥生土器を濃密に包含する暗褐色砂質土層に至る。この包含層を手掘りで下げたところ，各グリッドを縦断するような，東から西に流れる溝状遺構（SD01）と，第1グリッドの西端で溝が広がった状態の落込み（SX01）を検出した。また，庵山の斜面の末端にかかる第3グリッドでは，SD01に平行するもう1本の溝状遺構（SD02）を検出した。

1　SD01

遺構について（第7～9図，図版 2）

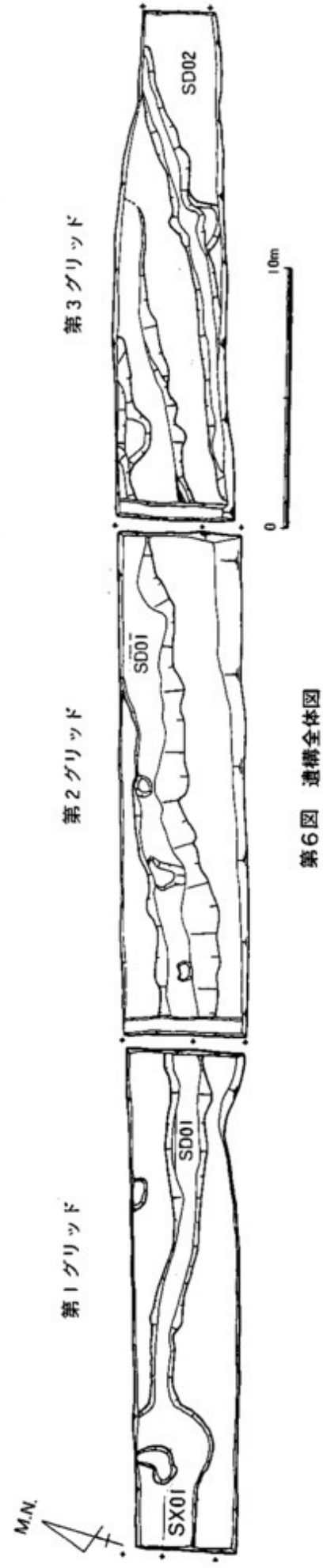
第3グリッドの北西端から，わずかに蛇行しながらゆるくカーブを描いて，第1グリッド西端のSX01に流れ込んでいる。約42mの延長で検出した。幅や深さは一定しておらず，第1グリッドで約1～1.5m，第2グリッドで約2m，最大幅部分で2.6mの幅をもつ。深さは20～25cm程度である。

埋土は暗褐色砂質土で，場所により底に砂や小礫が堆積していて，かつて流路であった痕跡を示している。

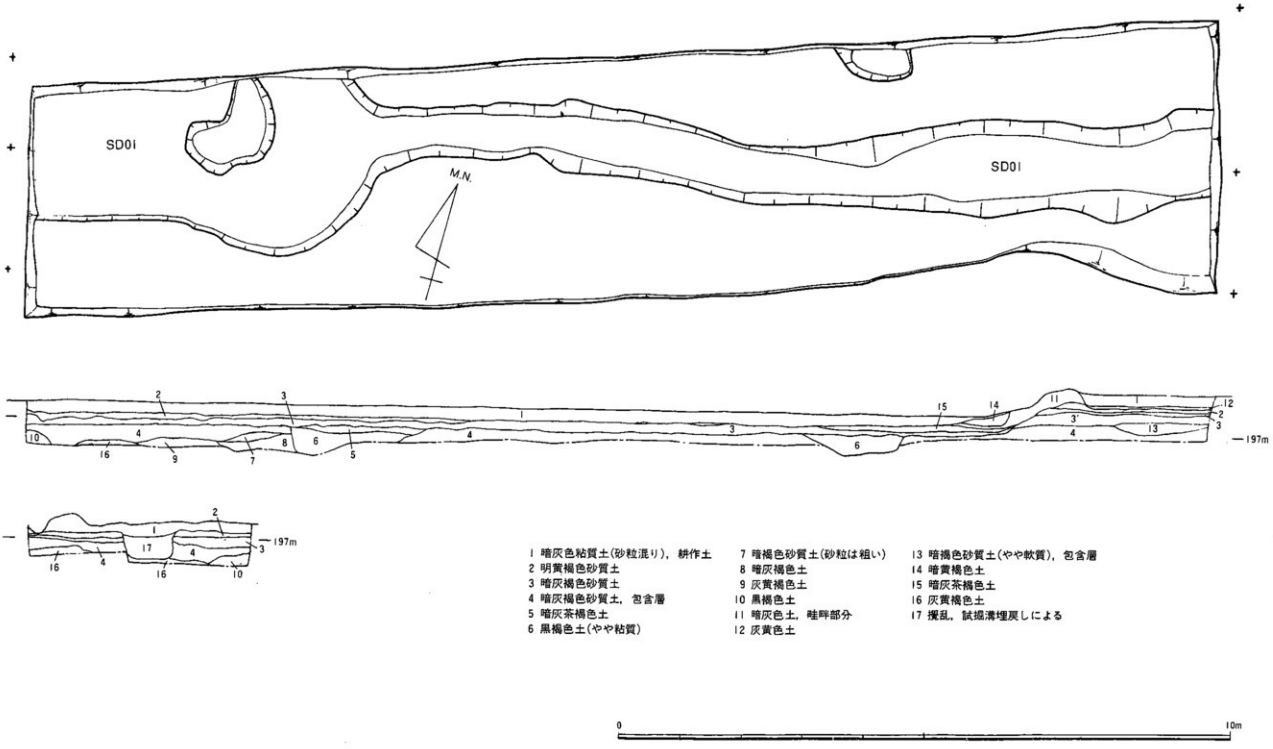
遺物について（第10～15図）

全遺物の5割以上がこのSD01から出土している。主な遺物としては，壺，甕，鉢，高坏などがあげられる。

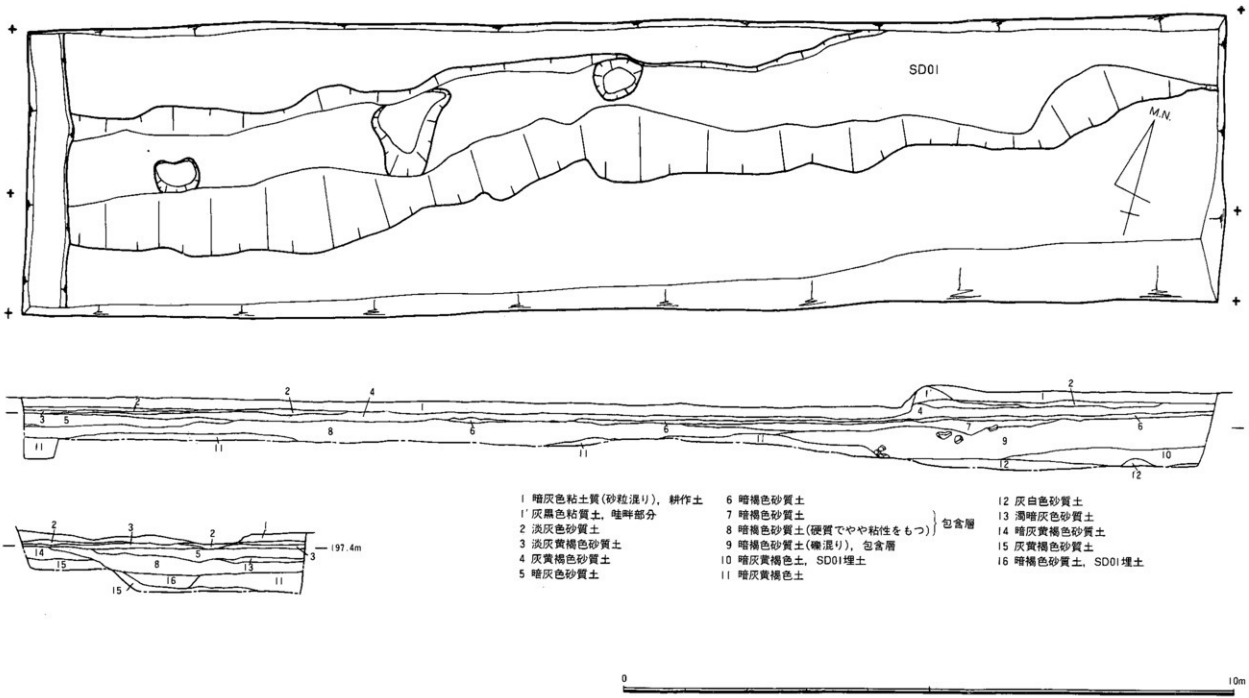
第10図1～18，第11図1～3は壺である。第10図は上下に拡張した口縁部に鋸歯文と竹管文を施している。2は口縁部が外



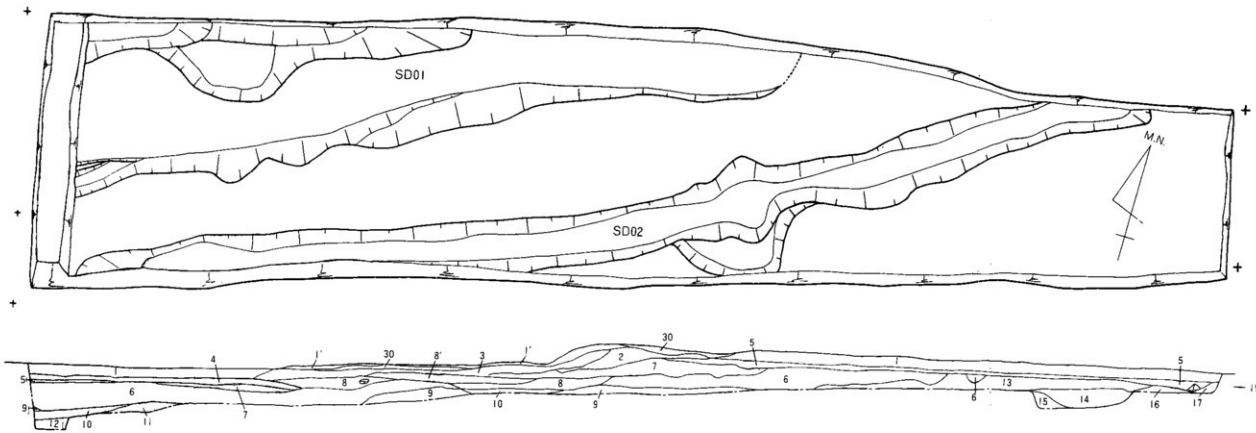
第6図　遺構全体図

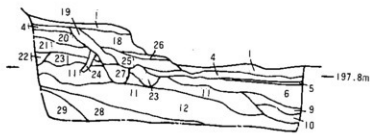


第7図　第1グリッド遺構平面図，同北壁・西壁土層図



第8図　第2グリッド遺構平面図，同北壁・西壁土層図





1 暗灰色粘質土(砂粉まじり)，耕作土
1' 〃 農道部分
2 〃 (やや粒子が粗い)
3 暗灰色土(硬質)
4 淡灰色砂質土
5 黄褐色土
6 暗褐色砂質土，包含層
7 濁灰褐色砂質土
8 灰色砂質土
8' 淡灰色砂質土(やや硬質)
9 暗灰黄褐色土
10 暗灰褐色土 } SD01埋土
11 明灰黄色砂質土 }
12 濁灰色砂質土
13 暗灰黄褐色土，包含層
14 暗褐色土
15 暗灰黄褐色土(やや粘質で粒子が細かい) } SD02埋土
16 暗灰黄褐色砂質土，包含層
17 黄褐色土
18 暗灰色土
19 暗灰黄色土
20 濁暗灰色砂質土
21 暗灰褐色土
22 黒褐色土
23 暗茶褐色砂質土
24 暗褐色砂質土
25 灰色砂質土(礫混り，硬質)
26 暗灰褐色土(花崗土混り)
27 濁暗灰褐色土
28 濁灰色粗砂
29 濁灰色砂
30 花崗土(客土)

0 10m

第9図 第3グリッド遺構平面図，同北壁・西壁土層図

下方に拡張する。3は垂直に立ち上がり，4はややくびれて立ち上がる口縁部をもつ広口壺である。5は，口縁部外面に径1㎝程度の竹管文をもつ。6はいわゆる雲母土器である。7・8は口縁部が内傾して拡張する。外面に鋸歯文をもつ。9・10は内外面にヘラミガキを施している。いずれも雲母土器である。13～17は短頸壺である。16・17は体部にタタキ目を残す。18は直立する長い頸部をもつ。口縁部には竹管文を施している。第11図1は口縁部に3条の凹線をもつ。4は製塩土器に類似した形状の台付鉢である。外面に部分的にハケ目が見られるほかは指ナデによる整形である。5～15は鉢である。9の外面はタタキ目の上にハケ調整を施している。10はやや外反して端部は上下にわずかに拡張する。11はタタキ目のみによる整形である。12は外面にち密なハケ目，内面はヘラミガキを施している。13は内面に指押えの上ハケ調整を施し，更に横方向のヘラミガキ，下半分は放射状にヘラミガキを施している。

第12図1～24，第13図1～4は甕である。第12図1は小型の甕である。「く」字状に外反する口縁部と倒卵形の体部をもつ。タタキの上にハケ調整を施している。2～9も外面はタタキによる。7は体部の大きさの割に口縁が長く延び，その外面にまでタタキを施している。10～24はハケ目のみを残す。21は頸部の内面に棒状の圧痕が認められる。第13図1，2はいわゆる播磨系とされる土器で，胎土に多量の雲母片を含み，茶褐色を呈する。3，4は播磨系土器に極めて近いプロポーションであるが雲母を含まず，やや淡い色調である。

5～28及び第14図1～12は各器種の底部である。6，7，20のように底部裾までタタキ目を残すもの，8～13，18のように裾に指頭痕の見られるもの，第14図6，7のようにヘラミガキを施すものなどがある他，大半のものはハケによる調整である。なお，第13図9，第14図12は底部が穿孔されており，甑と思われる。

第14図13～27は高坏である。坏部の屈曲が13，14，17のようにゆるいものと，残りのように著しいものとがある。ヘラミガキ等ていねいな調整のものが多い。9，21は坏部の上面から見て正方形の形にヘラミガキを施している。16，18，19，21は播磨系と呼んでいる，雲母を多量に含む甕と共通した胎土である。なお，22は脚台付鉢あるいは小型壺の脚部と思われる。27は24～26とは異なる脚端部をもつ。

他に，サヌカイト製打製石包丁2点，石鏃1点が出土している（第20図）。

2　SX01

遺構について（第7図）

SD 1の延長上，第1グリッドの西端で検出された。東西5.6m，南北2.2～3mの範囲で精査することができたが，北方向，西方向への遺構の広がりは，調査区外及び道路下に延びているため，確認することはできなかった。

遺構は深さ10～15㎝で，底面は一定しておらず，部分的に浅い落ち込みがある。埋土はSD01

とほぼ同一の暗褐色砂質土で，部分的に黒褐色土の堆積が認められる。遺物もＳＤ01同様の出土状況，内容であり，ＳＤ01出土の破片と接合できる土器片もあった。

遺物について（第15図）

壺（１，２），甕（３～10），鉢（11），その他底部（12～16），高坏脚部（17）などが出土している。

１は，広口壺の口縁端部であろう。２も直立した頸部の上端が外反気味であることからこれも広口壺であろう。

甕は，３～５のように口縁部が丸みをもって外反するもの，６～10のように「く」字状に外反するものとがある。９，10は外面にタタキ目をもつ。いずれも内面に粘土紐痕を明瞭に残している。

11は口径33cmの大型の鉢である。内外面とも体部にナナメハケ調整を施す。体部外面から口縁端部にかけて，赤色顔料の付着がみられる。

15,16は底部に穿孔をもつ。甑と思われる。15は現存部分で１孔，16は⁂のような６孔である。

17は高坏の脚である。内面にヘラケズリが残る。

３　ＳＤ02

遺構について（第９図，図版３(1)）

第３グリッド内では，ＳＤ01は北西端をかすめて用地外へ延びているが，その面より一段高い南側で，ＳＤ02が検出された。ＳＤ02は細長い第３グリッドで対角線を描くように，北東から南西に向かって流れている。延長は約18ｍ，幅0.8～１ｍ，深さ0.3～0.4ｍを測る。断面は倒台形を呈する。

埋土は，やや砂質気味の暗褐色土である。ＳＤ01の埋土より，やや黒っぽい。出土遺物の量は少ない。

遺物について（第16図，図版８－５）

１の壺は，頸部が長く，ゆるやかに外反する。端部はわずかに拡張する。

鉢２は，口縁部が外反し，その内側に横方向のハケ調整を施す。

甕（３，４，５）のうち，３は丸みをもって外反し，上方に拡張した口縁部に２条の凹線をもつ。４は倒Ｌ字形に外反し，上下に拡張した口縁部である。

７は脚台付の鉢または壺であろう。底部は円板充填による。脚柱部に５箇所円孔が穿たれている。

4　包含層の遺物（第17，18図）

溝状遺構等の上面を覆う包含層は，第3グリッドでは希薄になっているが，第1，第2グリッドでは20～50cmの厚さに広がっている。主に暗褐色砂質土で，ＳＤ01の埋土に近似しているが，包含層の方がやや締まっている。

遺物量は極めて多く，全出土遺物の約4割を占める。一部上層での攪乱層に混入していたと思われる数点の須恵器片や中世の土鍋の脚部（第22図）等を除くすべてが弥生土器である。器種も，壺，甕，鉢，高坏，大型器台と多岐にわたっている。

壺（第17図1～11）はいずれも頸部から口縁部にかけてしか残存していない。1は直立した頸部から倒Ｌ字形に近い外反をみせ，端部は上方に拡張する。口縁部内面はていねいなヘラミガキがなされている。2はゆるく外反した後直立する端部をもつ。8も同形態であるが，口縁部外面に粗雑な鋸歯文が施されている。3～6は丸く外反する口縁部をもち端部は3，5が下方に，4が上方にわずかに拡張する。7は長頸壺である。茶褐色を呈し，胎土に微細な雲母片を多く含む。いわゆる播磨系とされている土器群に包括される。9は短い頸部から外反し，やや内傾しつつ上下方向に拡張する端部をもつ。内外面ともに赤色顔料の付着がみられる。茶褐色を呈し，極めて多量の雲母片を胎土に含む。これも7同様に播磨系土器とされている土器群に共通した胎土，焼成である。10は長い頸部から水平気味に外反し，端部がやや上方を向く口縁部をもつ。頸部内外面ともにていねいなヘラ磨きを施している。11は10と似た形状の頸部をもつが，外面はタテハケ，内面はヨコハケによる調整がみられる。

12は浅鉢である。口縁部手前で細くくびれその下で極端に肥厚している。外面はタテ方向、内面は斜めに不規則なヘラ磨きが施されている。

13は高坏の脚部である。四方向に穿孔されている。

14は大型の器台である。穿孔は2段。外面にはタテハケの上，ヘラ描き沈線文が横方向に不規則な間隔で施されている。

第18図の1～8は甕である。1は「く」字状に外反して，やや肥厚気味になり，端部は外方向に拡張する。口縁部には条線がかすかに残る。2は，鋭角的な「く」字状に外反し端部は上下に拡張する。口縁部下方に2条の凹線が施されている。3・4は体部外面に，タタキ目の上にハケ調整が施されている。5・6・8はいずれも播磨系と呼ばれている甕である。雲母を多く含み，茶褐色を呈する。7は同じ形態ではあるが胎土中に雲母が見られず，橙褐色を呈する。9～23は各種の土器の底部である。17・19は短い脚台部をもつ。

5　遺構下包含層の遺物（第19図）

1は完形の壺である。口径11.8cm，器高24.4cmを測る。頸部及び底部にヘラミガキを施し，体部の殆どはハケ目の上をナデている。

2～6は甕である。4は丸く外反したのち端部が上方に拡張する。6は「く」字状に外反し，端部は外方向に雑に折り返している。

7，8，10は鉢である。7は口径40cm以上の大型である。9，11，12は甕あるいは鉢の底部である。9は底面にまでていねいなハケ調整が施されている。13は高坏の脚部である。

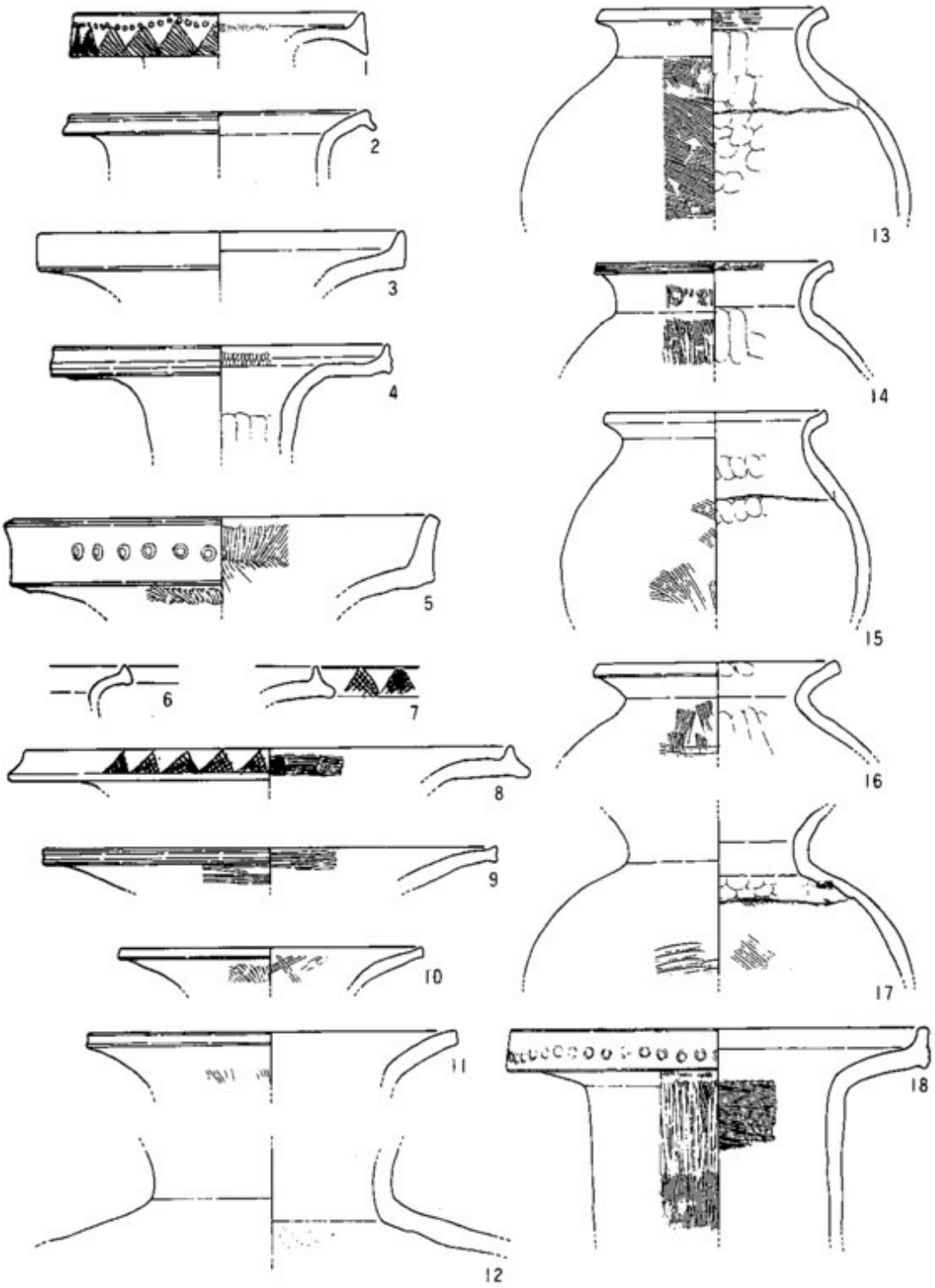
6　その他の遺物（第20～23図）

第20図のうち，石包丁と石鏃はＳＤ01から出土した。1は抉りの入るタイプである。2は$\frac{1}{3}$ほどを欠く。3の石鏃も先端が欠損している。いずれもサヌカイト製である。4の敲石，5・6の磨石はいずれも包含層から出土した。砂岩製である。

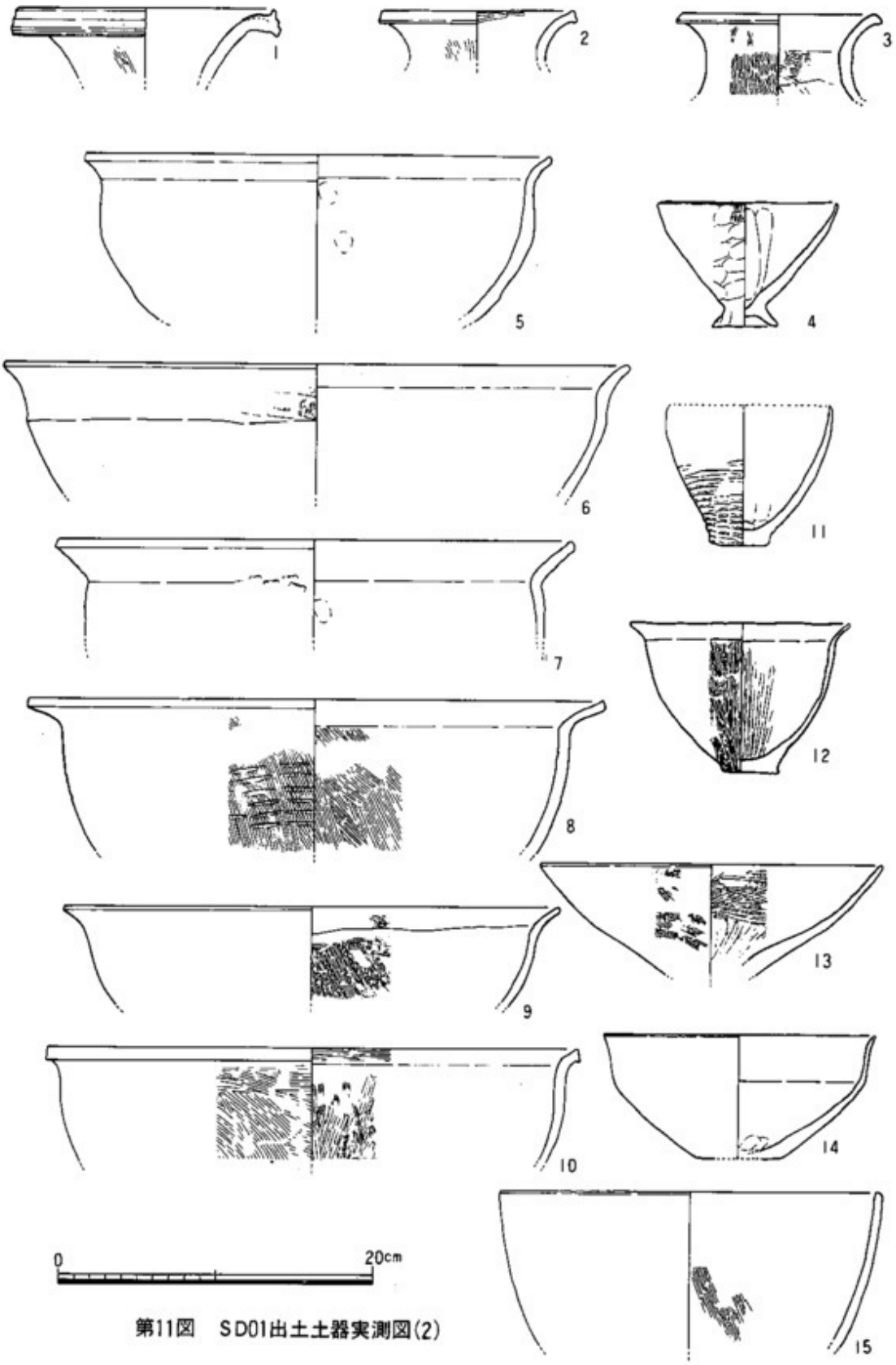
第21図は今回の調査中に出土した縄文時代早期の押型文土器である。1は第1グリッド遺構下の包含層から出土した，深鉢の口縁部である。わずかに外反して端部が肥厚している。粗大な楕円文が，外面に端部より1.5cmほど下から施されている。内面には施文は見られない。磨滅が著しく，内外面とも器表面が荒れている。2は第2グリッドＳＤ01の埋土から出土した。これも深鉢の体部であろう。1同様，ローリングを受けて磨滅が著しい。

また，以前から隣接地で中世の土鍋の脚部が農作業中にしばしば出土しており（第22図1～3），今回の調査においても出土した。近隣に中世の遺構が存在することも予想できる。第22図4が第2グリッド耕作土中より出土したものである。

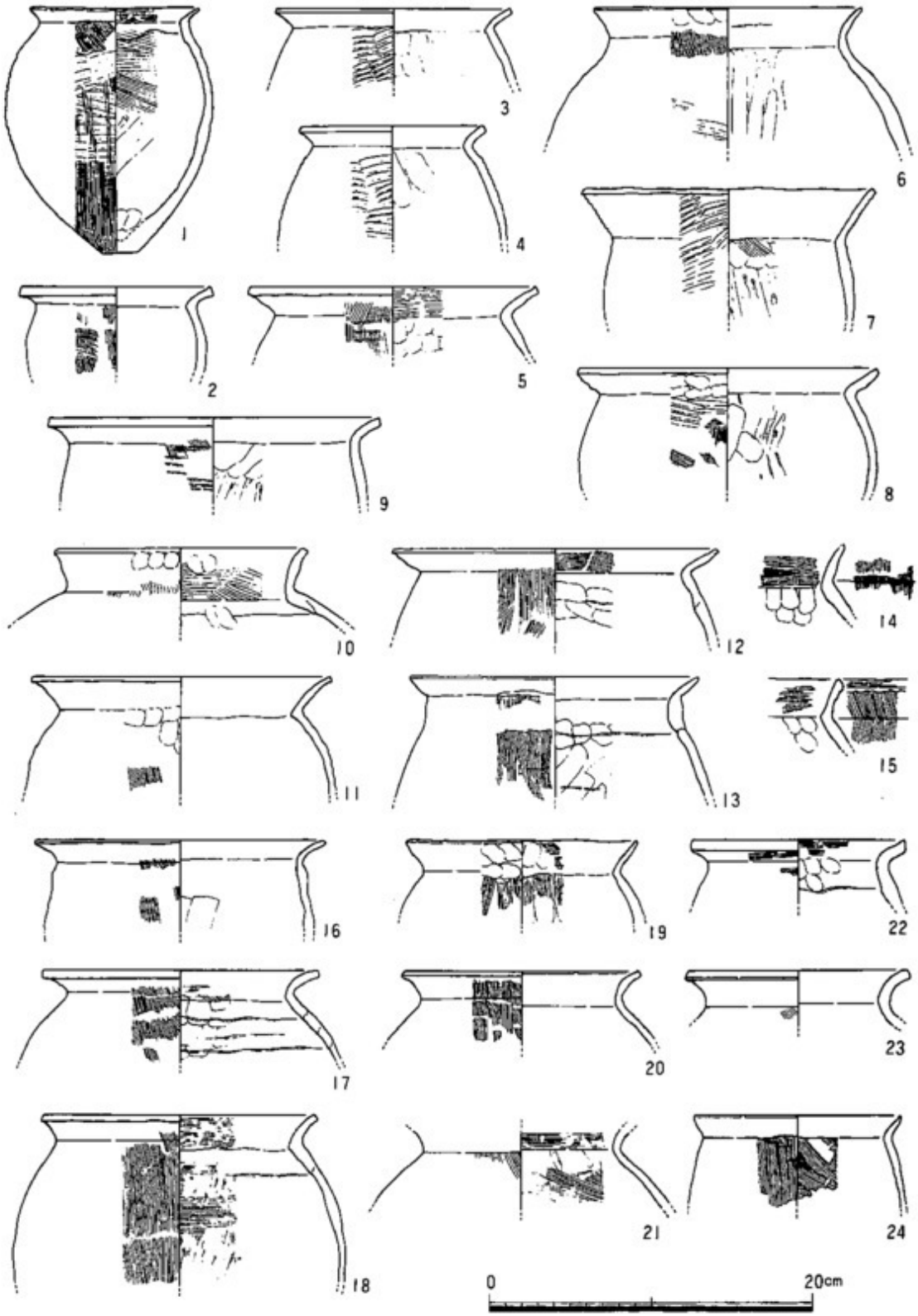
第23図は，昭和61年3月末に，今回の調査区の南西に隣接した民家側の現道路路肩改修工事中に出土した弥生土器である。1，3は甕，2は壺と思われる。いずれも極めてもろく，1，3の体部にはかろうじてタタキ目が認められる。2の外面はハケ，内面は板ナデとユビオサエにより調整されている。



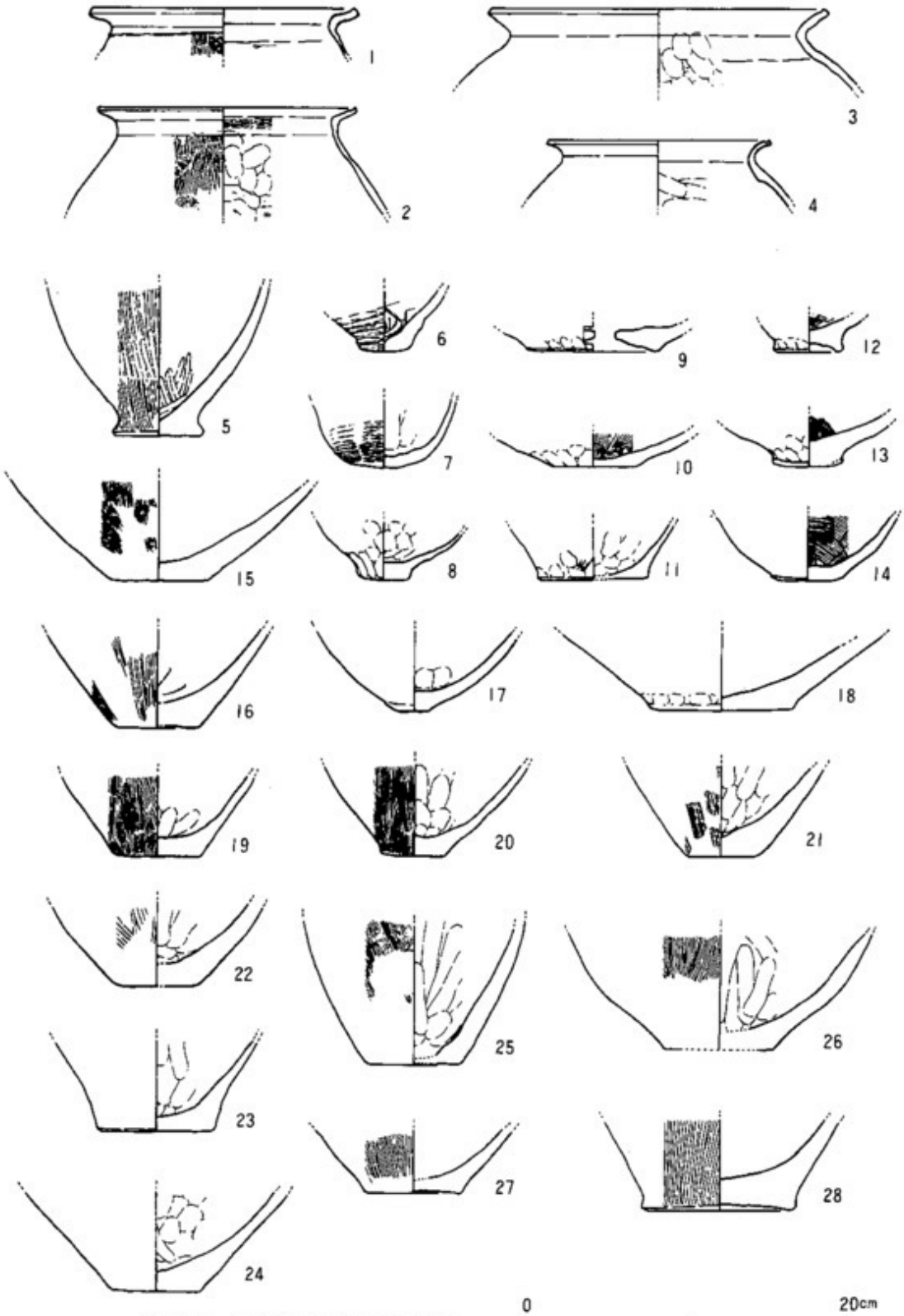
第10図　ＳＤ01出土土器実測図(1)



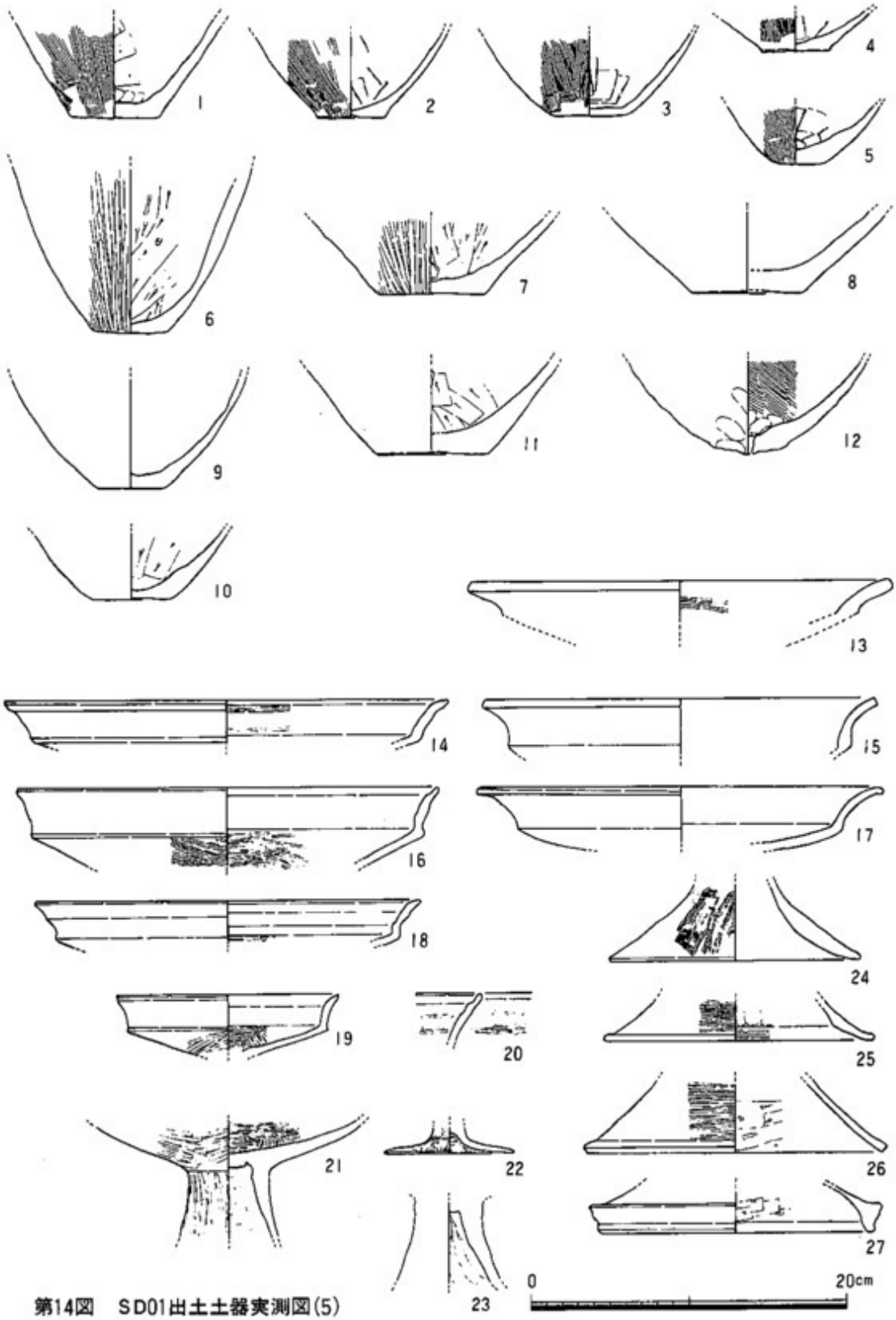
第11図　SD01出土土器実測図(2)



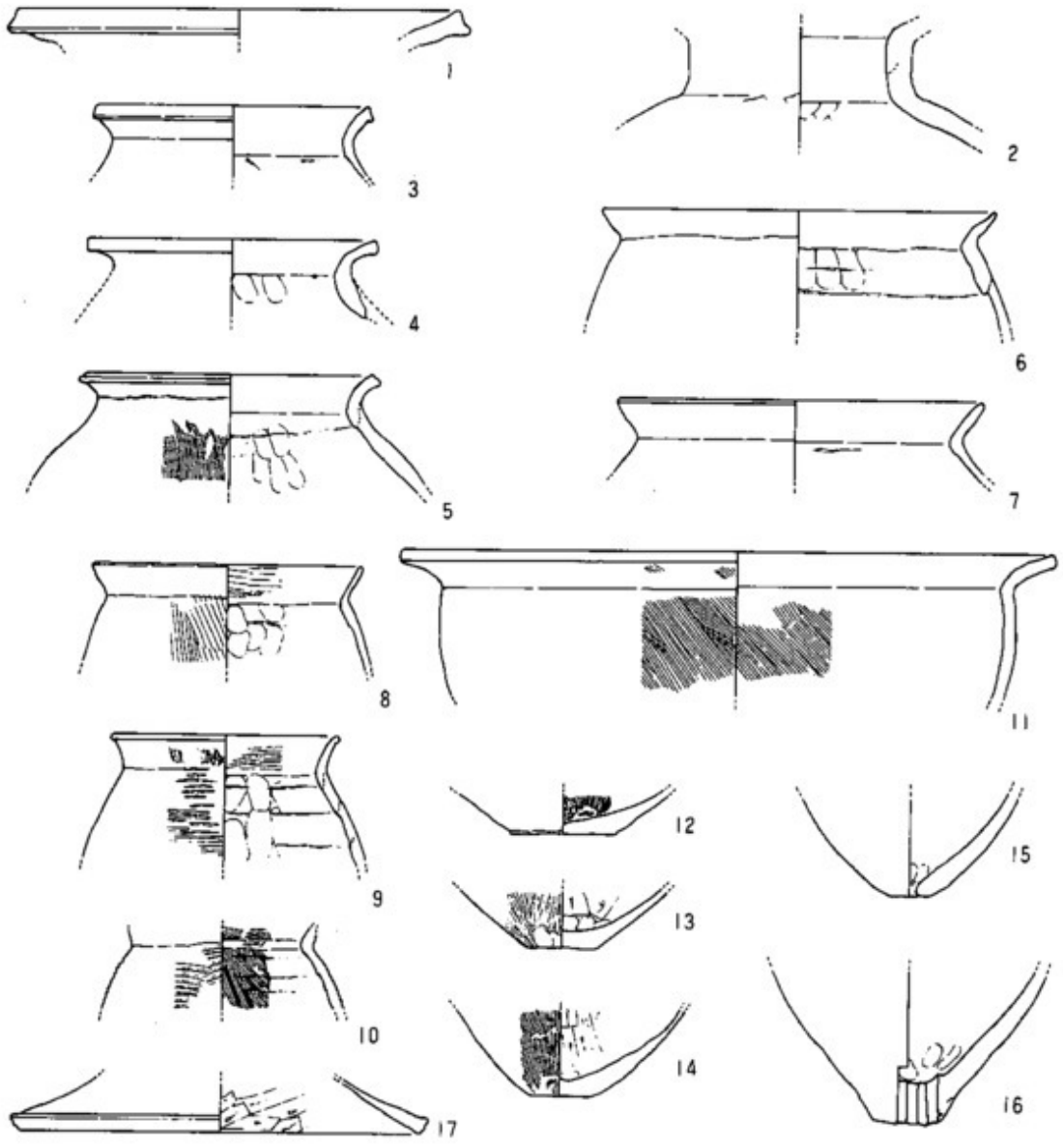
第12図　SD01出土土器実測図(3)



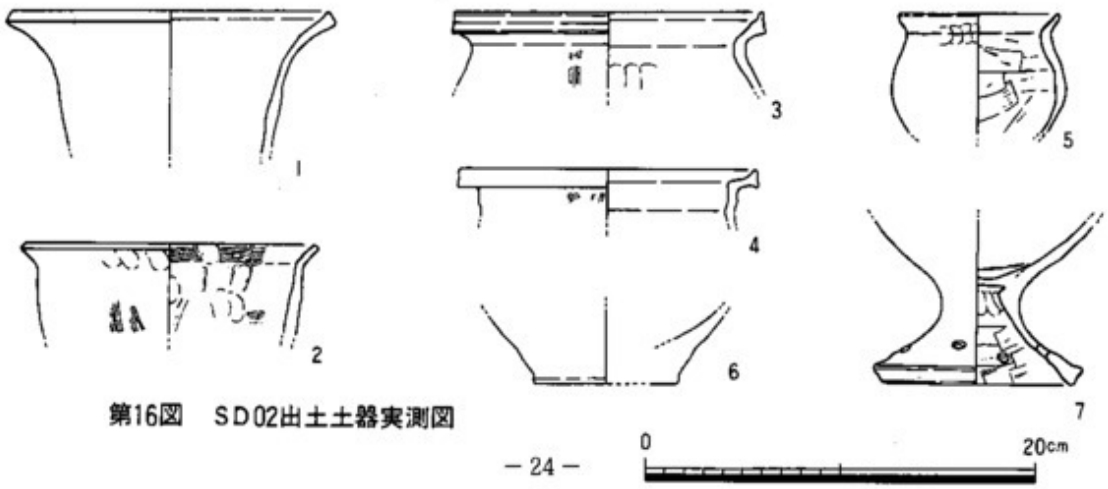
第13図　SD01出土土器実測図(4)



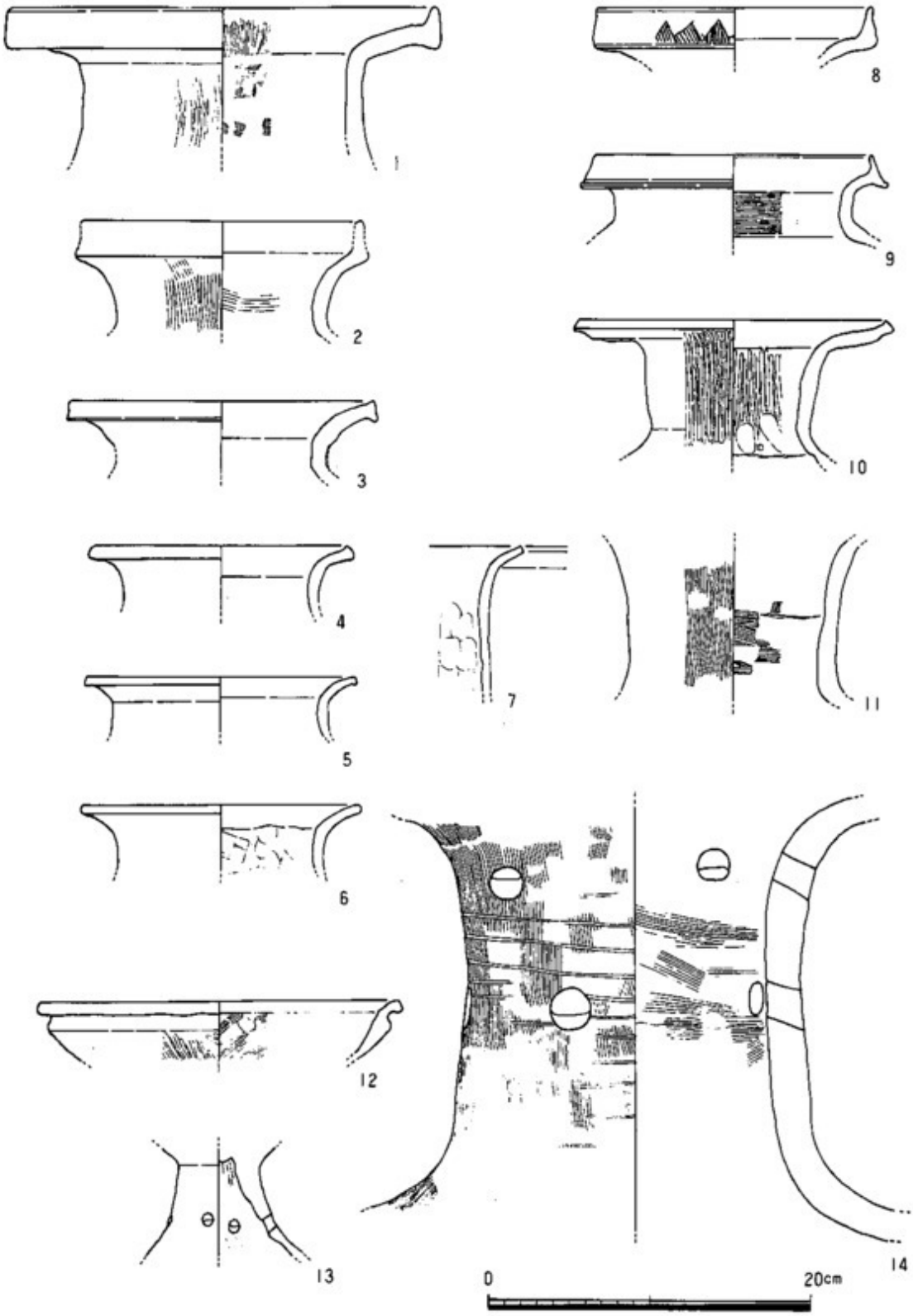
第14図　SD01出土土器実測図(5)



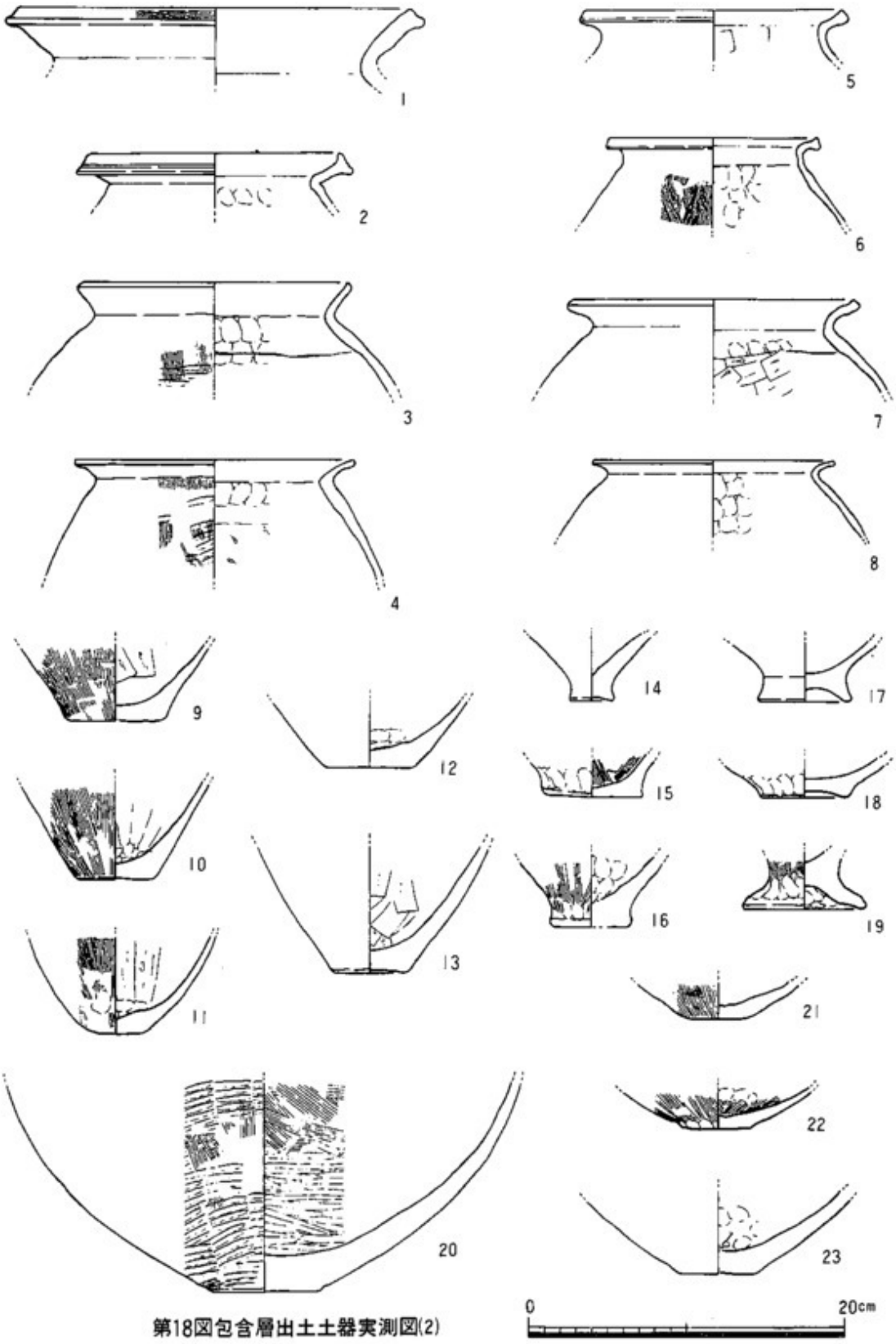
第15図　SX01出土土器実測図



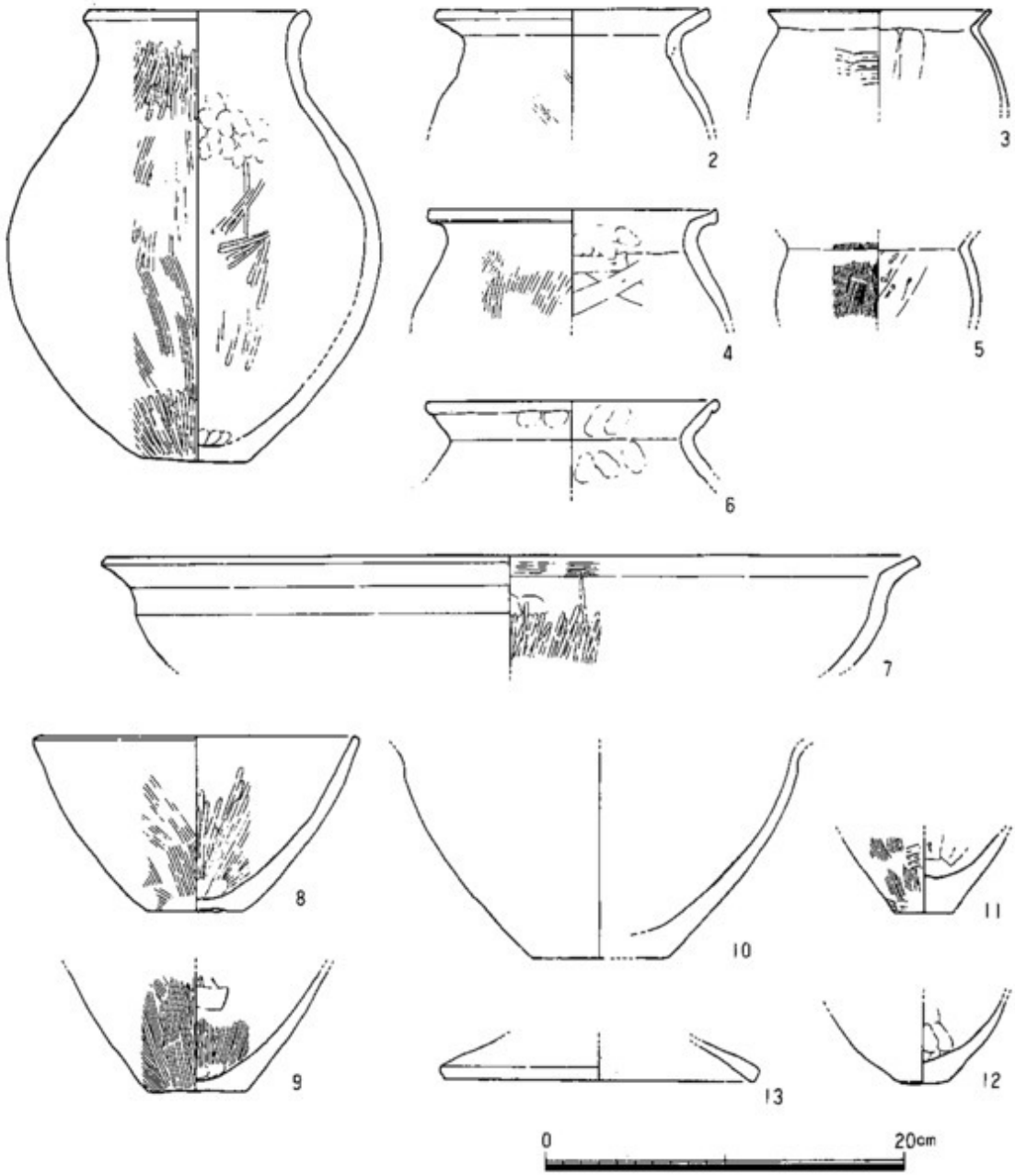
第16図　SD02出土土器実測図



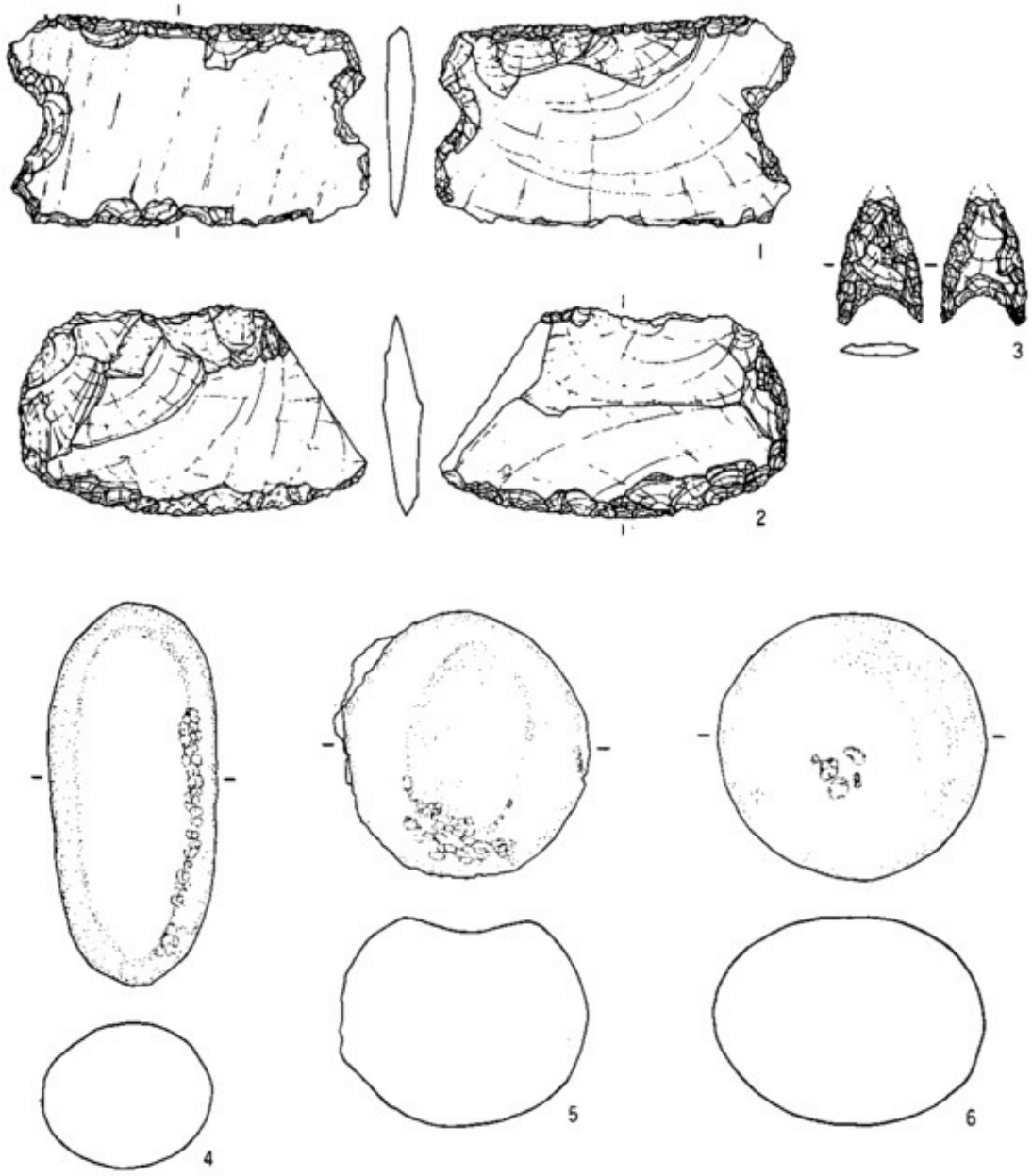
第17図　包含層出土土器実測図(1)



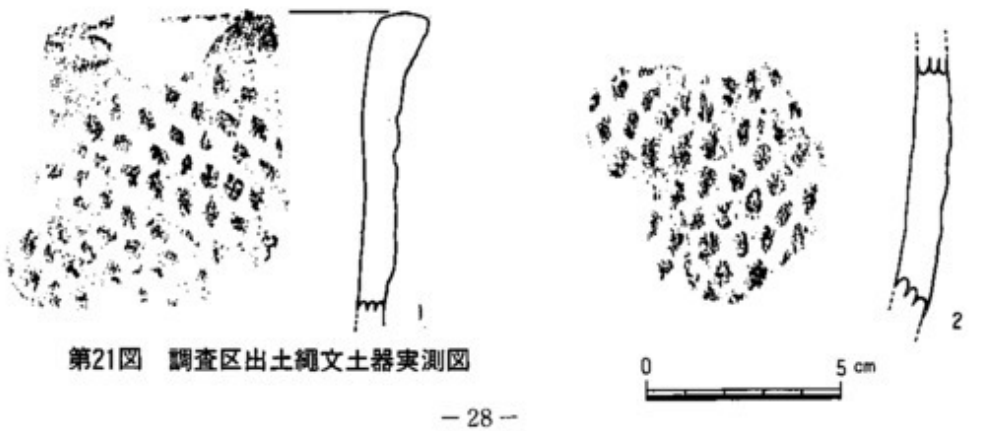
第18図包含層出土土器実測図(2)



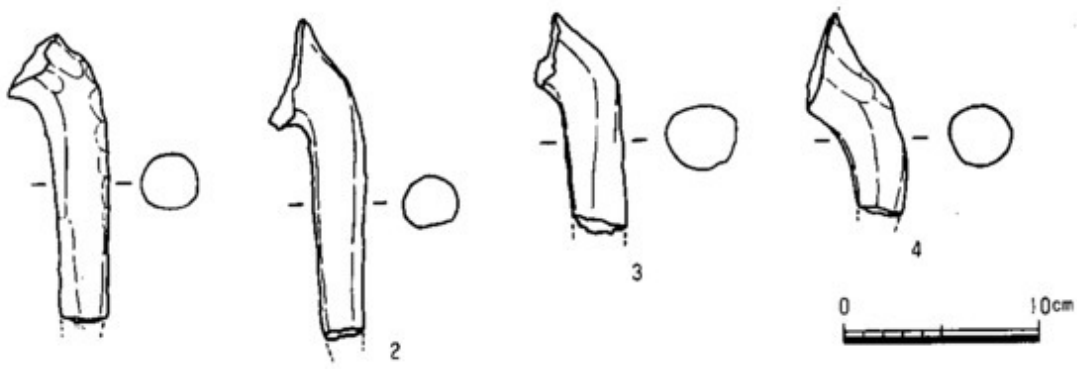
第19図　遺構下包含層出土土器実測図



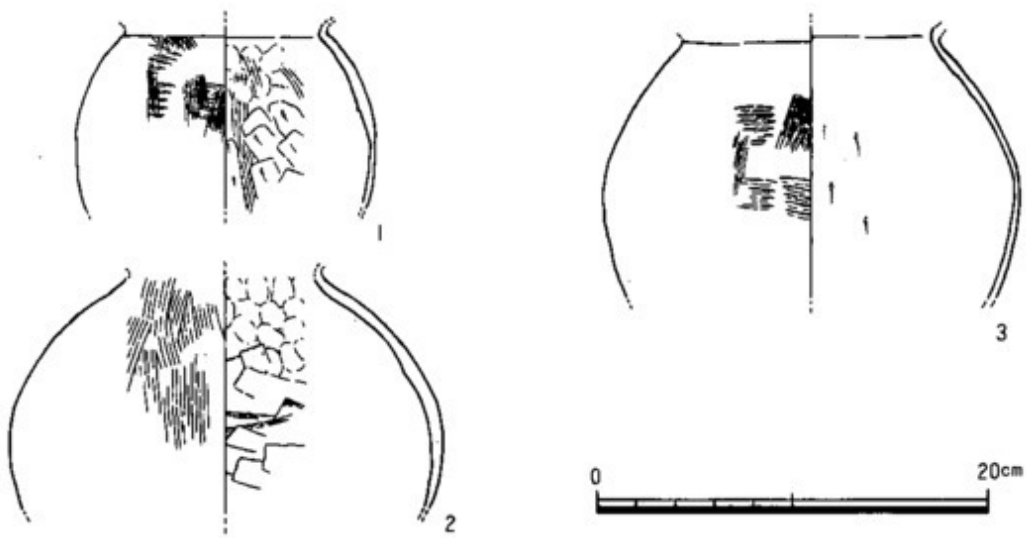
第20図　調査区出土石器実測図



第21図　調査区出土縄文土器実測図



第22図　中世土器実測図



第23図　調査区隣接地出土土器実測図

第4章　まとめ

今回の調査は，県道の拡幅分という限定された範囲において実施したものであったが，わずか250㎡という狭い調査区から，完形の土器を含めて28ℓ入り整理コンテナに換算して20箱分という多量の遺物が出土した。その大半は，溝状遺構ＳＤ01とその末端の土坑状の落込みＳＸ01及びそれらの上面を覆う包含層から出土したものである。

ＳＤ01及びＳＸ01の出土土器は，壺・甕・鉢・高坏・甑など日常雑器とされるものを主体としている。その年代は，一部に古い様相を示すものがあるが，殆どは弥生時代後期後半から終末期の範囲におさまる時期と思われ，従ってＳＤ01及びＳＸ01は，この時期に機能し，廃絶したものと考えられる。

ＳＤ02は，ＳＤ01の上手を平行するように流れているが，数少ない埋土中の遺物から弥生時代後期前半の所産と考えられる。

ＳＤ01，ＳＤ02は，機能していた年代に差があるとはいえ，ともに第３グリッドにおいては平行に流れている。この方向は，南に隣接する庵山の北西山裾のコンターに一致している。本遺跡が土器川支流の備中地川南岸の河岸段丘上に立地していることから，現在水田になっている段丘上の平坦地全域に集落が形成されている可能性が高いと思われる。

ただ，ＳＤ01が掘り込まれている面にも密度の濃淡はあるが弥生土器が包含されており（第20図），この土器とＳＤ01，ＳＸ01及び上部包含層の土器との形式に明確な時期差を認めることは困難である。またこの下部包含層からは弥生土器に混じって，後でふれる縄文早期の押型文土器が摩耗した状態で出土していることから，備中地川の氾濫により押し流されたものと推察される。

以上のことから，ＳＤ02廃絶後のある時期に備中地川が氾濫し，あまり時間を経ずして安定した氾濫原に新たな生活の場が形成され，溝ＳＤ01が造られ，機能した，という経過を想定することができよう。

また本遺跡においては，これまで中・西讃地方で発掘調査が行われたほぼ同時期の集落遺跡[註１]の状況と比較して，通常住居址内から出土することの多い，丸底の鉢もしくは椀と分類される土器が，１点も出土していない。このことが，遺跡の性格の違いによるのか，地域的な特色なのか，現状では判断する材料に乏しく，将来，集落域と想定される北側隣接地での面的な発掘調査の機会を得ることができれば，その時点で検討したい。

ＳＤ01及び上部包含層中の土器の中で注目すべきものとして，当地で「播磨系土器」と呼ばれている，いわゆる雲母土器があげられる。これは，兵庫県太子町川島遺跡[註２]20溝出土の甕Ｂに類似した土器で，本県でも坂出市下川津遺跡，同高屋遺跡，善通寺市稲木遺跡，同彼ノ宗遺跡，寒川町布勢遺跡など同時期の遺跡から出土例が報告されている[註３]。しかし，他の遺跡同様に本遺跡でもその出土量は少なく，一部の研究者の間で提唱されている「讃岐系土器」という呼称[註４]が妥当かど

うか，現段階では判断し難い。

最後に，本遺跡から流れ込みの遺物として出土した２点の押型文土器について，若干触れておく。これらは，第１章に記した上流の備中地池出土押型文土器(註５)と同様，楕円文が粗大化した，縄文時代早期中葉のものであろう。県下では，押型文土器は現在までのところ，島嶼部の遺跡からの出土しか知られておらず(註６)，内陸，しかも山間部の遺跡としては初の出土例といえる。これらが流れ込みの遺物であることと，かつて上流の備中地池付近で採集されていることを考え合わせると，備中地池周辺に本来の縄文時代早期の遺跡が存在する可能性が高いと言えよう。

以上，幾つか問題点を提示したが，十分な検討を行うに至らなかった。今後の課題としたい。

なお，県下では，内陸，特に山間部についてはまだ遺跡の発掘調査例が少ない。換言すれば，まだ平野部のような大規模開発が及んでいない，ということであるが，それに先立つ遺跡の詳細な分布調査も実施されていない。今後波及するであろう開発に対処するために，詳細分布調査を実施して十分な情報を集積しておくことが望まれる。

註１・大山真充・藤好史郎他　『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅶ・Ⅷ）下川津遺跡，同Ⅱ』　香川県教育委員会　1986.3，1987.3

・岸上康久他　「一の谷遺跡群」『四国横断自動車道建設にともなう埋蔵文化財発掘調査実績報告　昭和61年度』　香川県教育委員会　1987.3

・笹川龍一　『彼ノ宗遺跡』　善通寺市教育委員会　1985.3

註２　石野博信　「川島・20溝の土師器群」『川島・立岡遺跡』　太子町教育委員会　1971.3

註３・下川津遺跡は註１に同じ。

・高屋遺跡…『埋蔵文化財研究会第15回研究集会資料』　1984.1

他は未報告

註４・松下勝「大溝出土土器の概観・まとめ」『播磨・長越遺跡』　兵庫県教育委員会　1978.3

・岩崎直也　「四国系土器群の搬出」『大阪文化誌』第17号　（財）大阪文化財センター　1984.3

・菅原康夫　『黒谷川郡頭遺跡Ⅰ』　徳島県教育委員会　1986.3

註５　第１章註２参照。

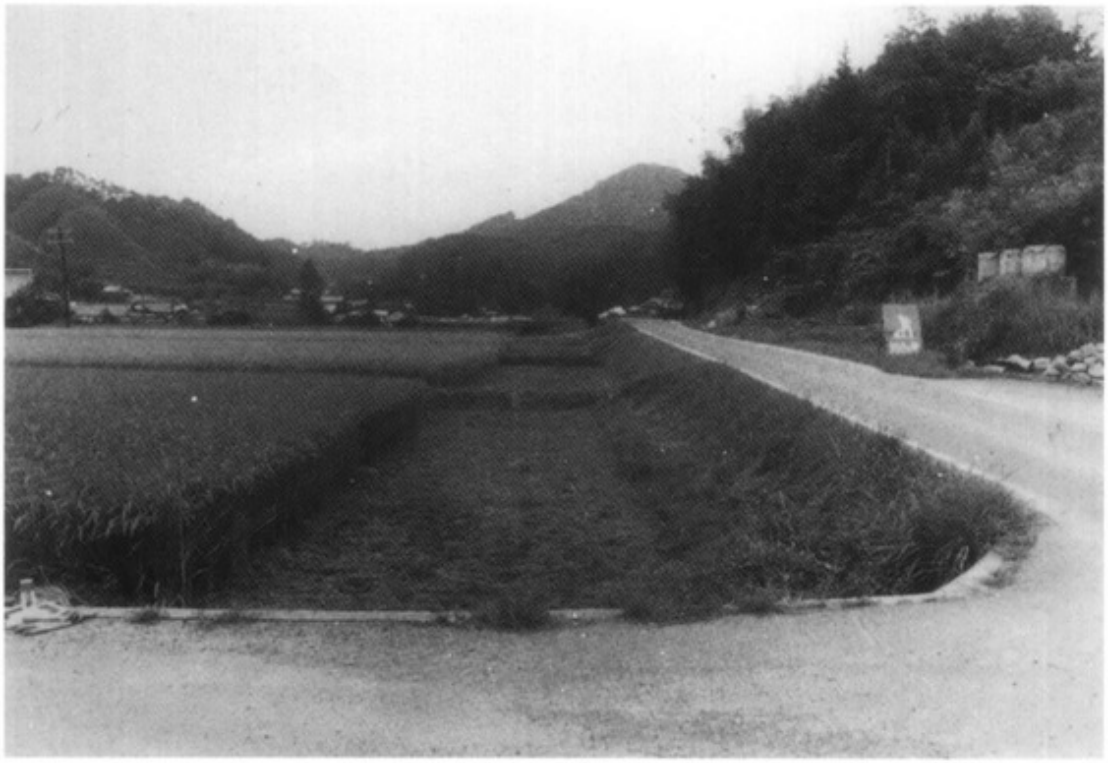
註６・渡部明夫他　『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ　羽佐島遺跡（Ⅰ）』　香川県教育委員会　1984.1

・藤好史郎他　『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ　大浦遺跡』　香川県教育委員会　1984.3

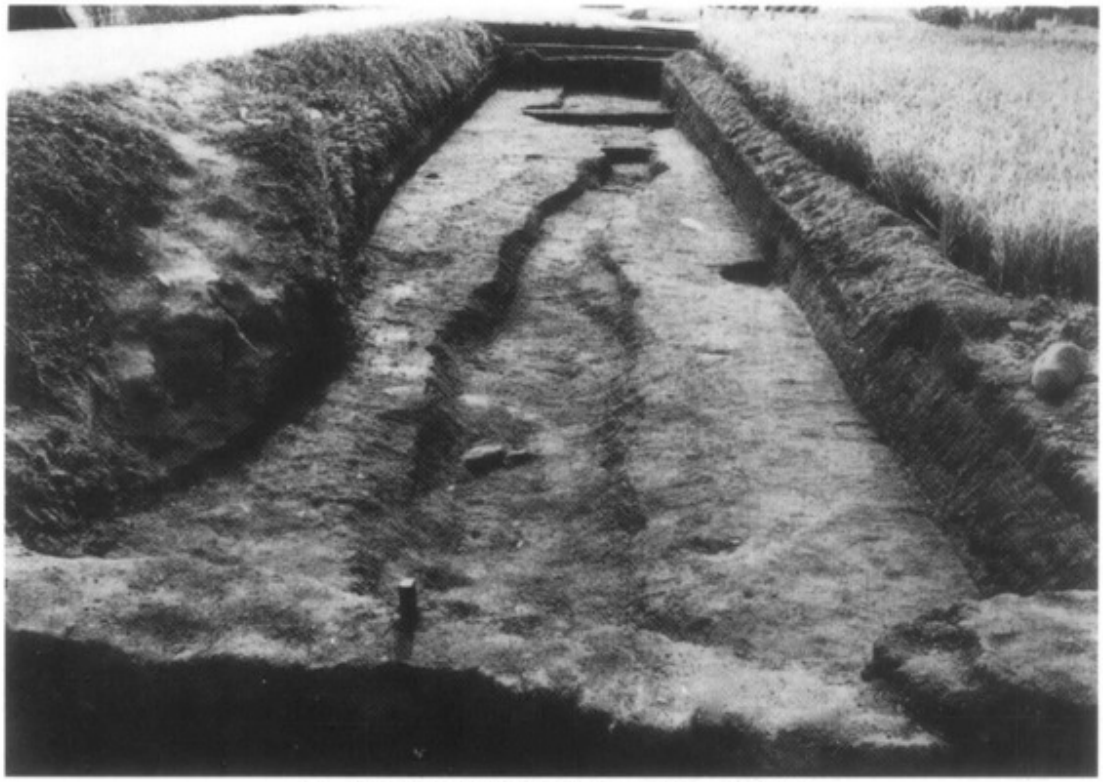
・他に小蔦島貝塚，礼田崎貝塚などで出土している。

図版1

1. 備中地遺跡遠景（写真中央が調査地点）



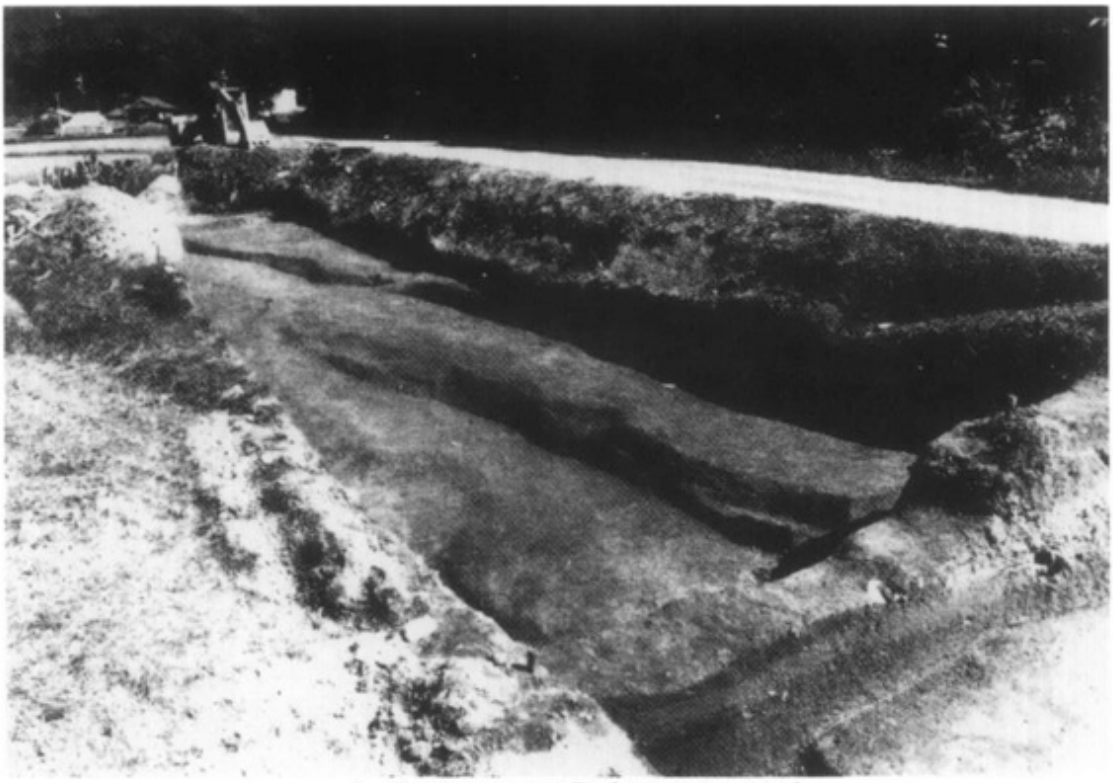
2. 調査前全景（西から）



1. 第1グリッド全景（SD01・SX01 東から）

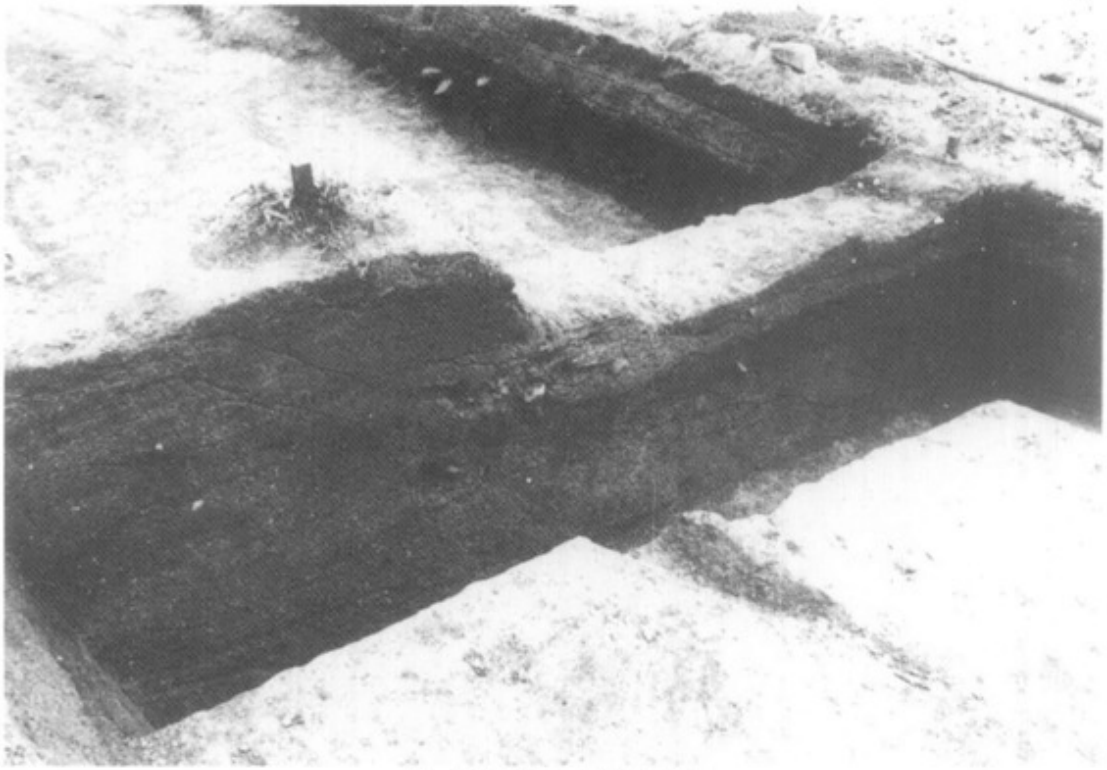
2. 第2グリッド全景（SD01 西から）

図版3

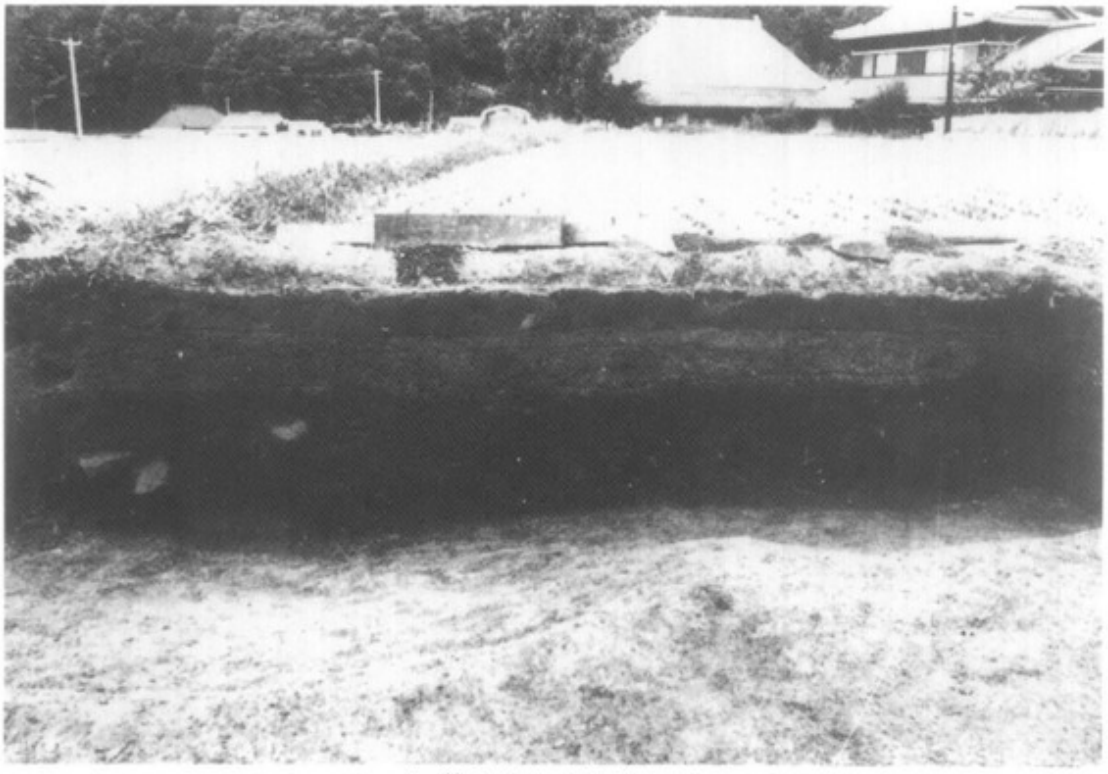


1. 第3グリッド全景（SD02 北西から）

2. 第2グリッド西壁（SD01）土層



1. 第3グリッド西壁土層



2. 第2グリッド北壁土層

図版5

1. SD01（第1グリッド）土器出土状況

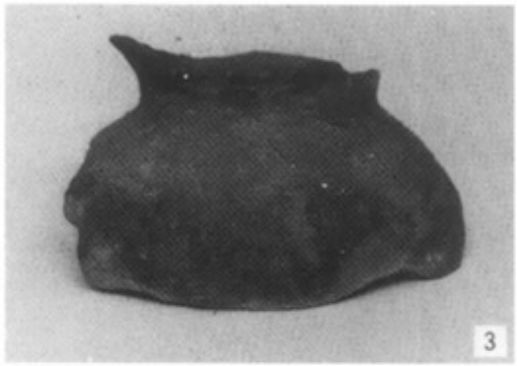
2. SD01（第2グリッド）土器出土状況

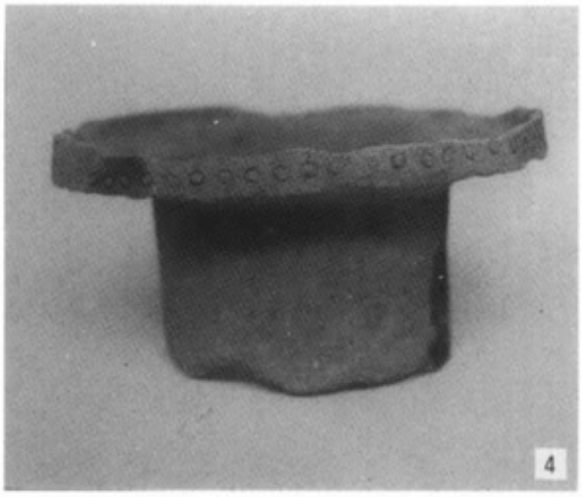
第1グリッドSD01下包含層土器出土状況

図版7

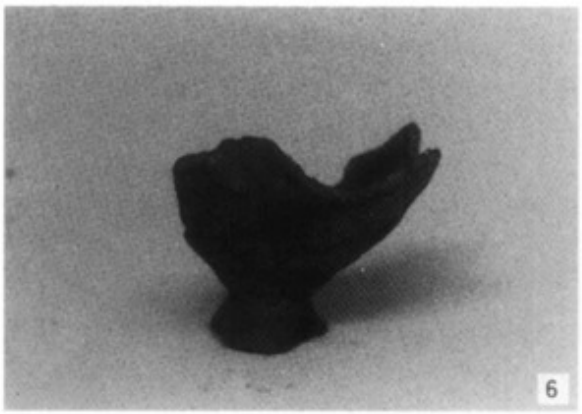
1

2

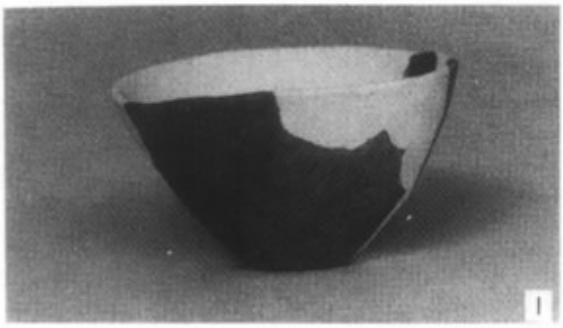

3


4

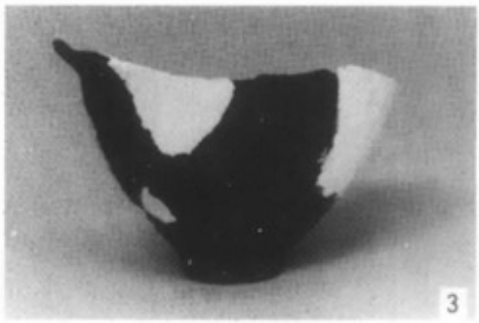
5


6

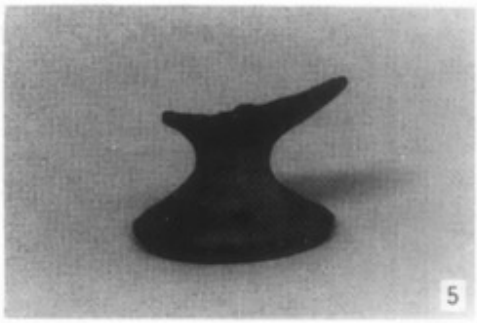
弥生土器（1）

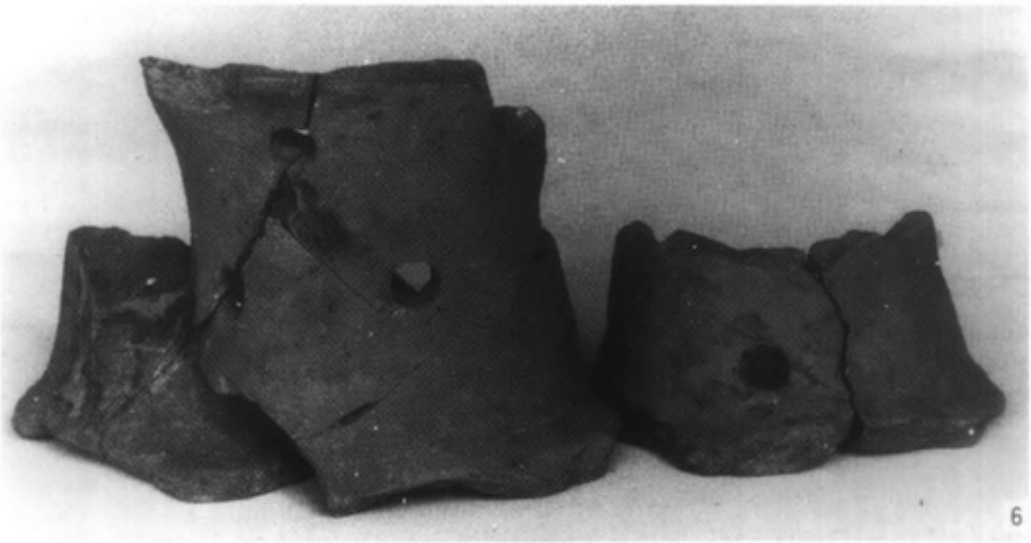

1

2


3

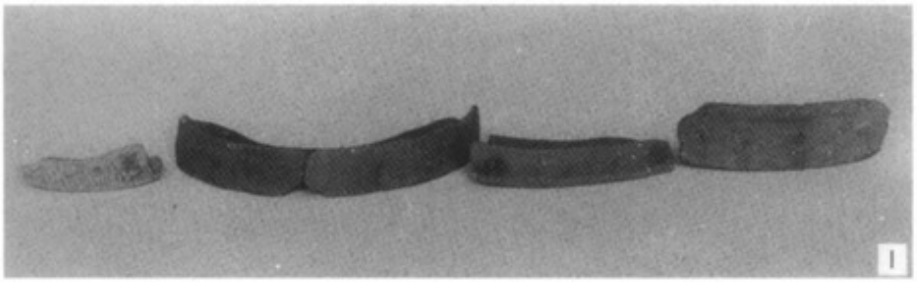
4

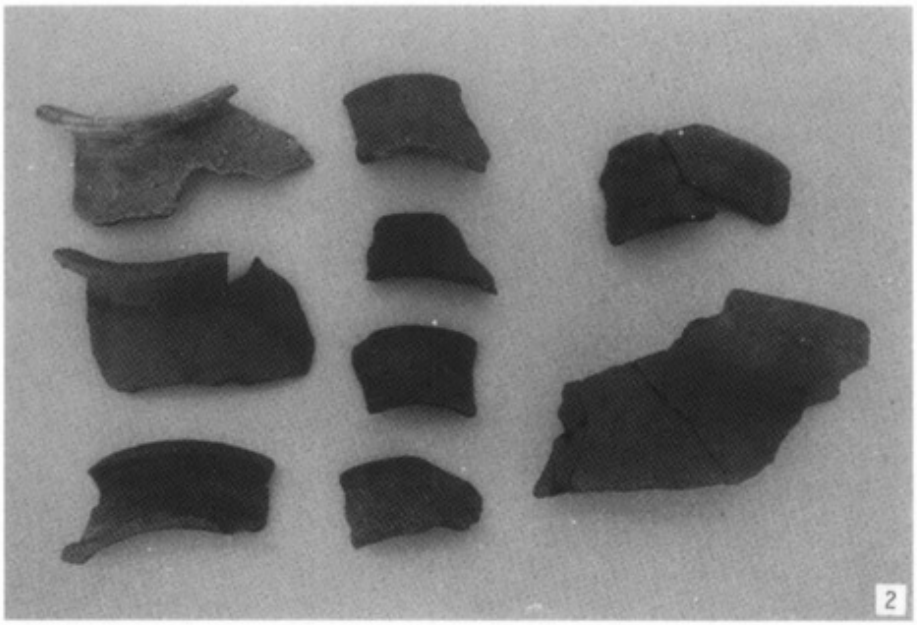

5

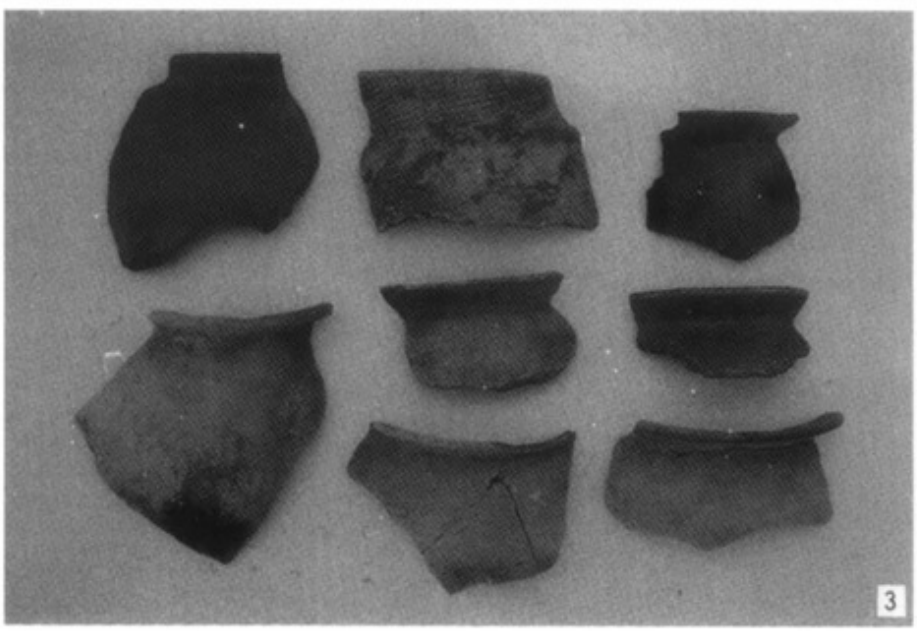

6

弥生土器（2）

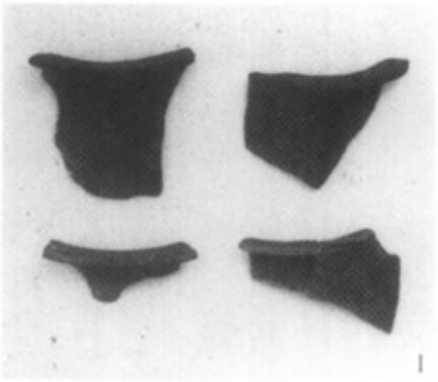
図版9

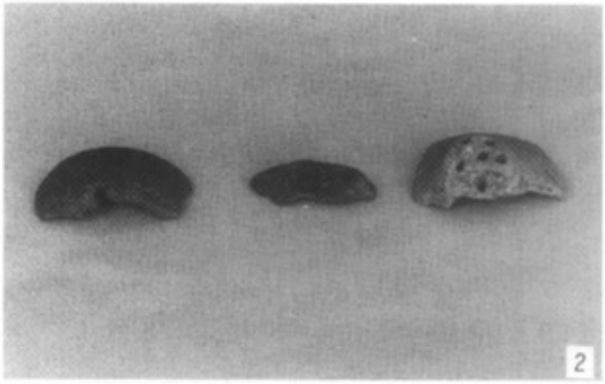


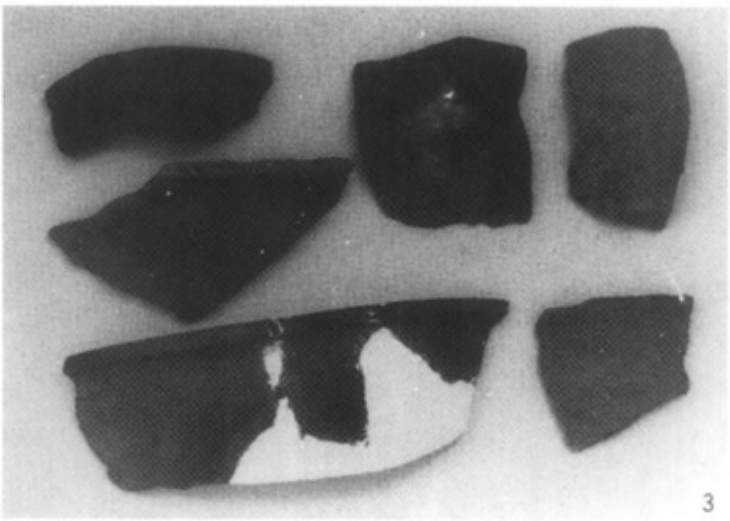


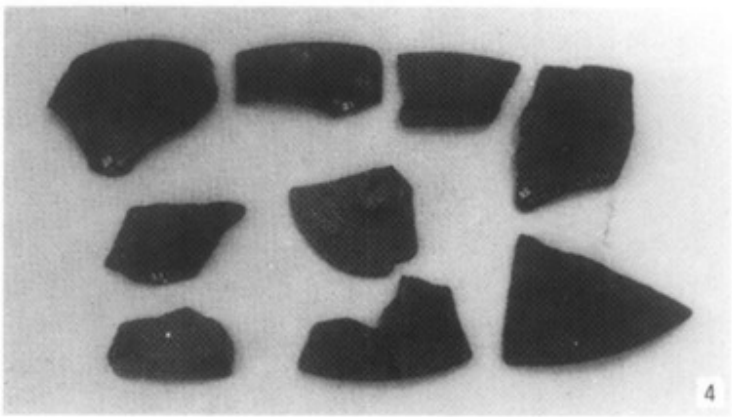


弥生土器（3）　1・2 壺口縁部　3 甕

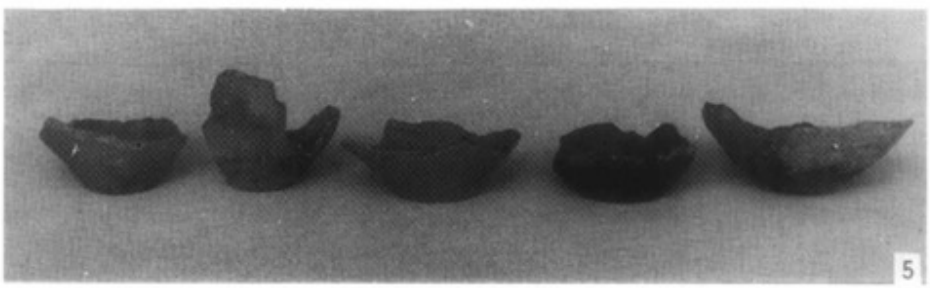






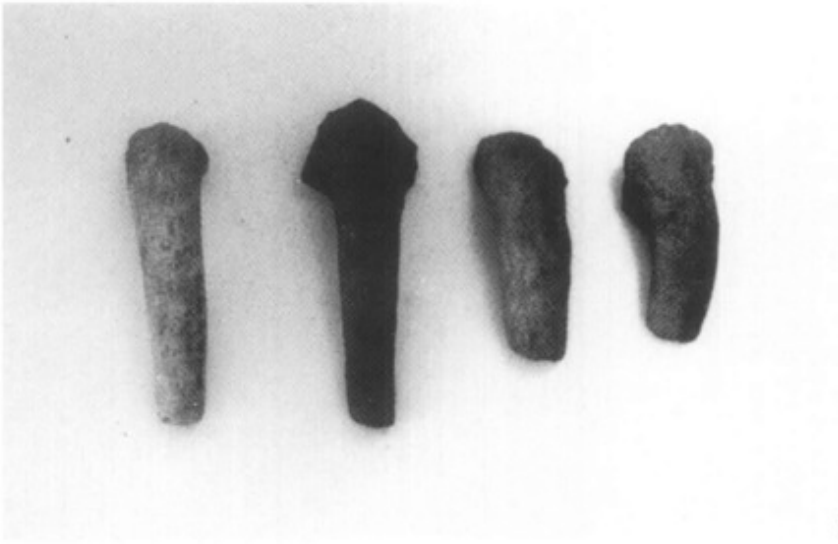


1 播磨系甕
2 甑
3 鉢
4 高坏
5 底部

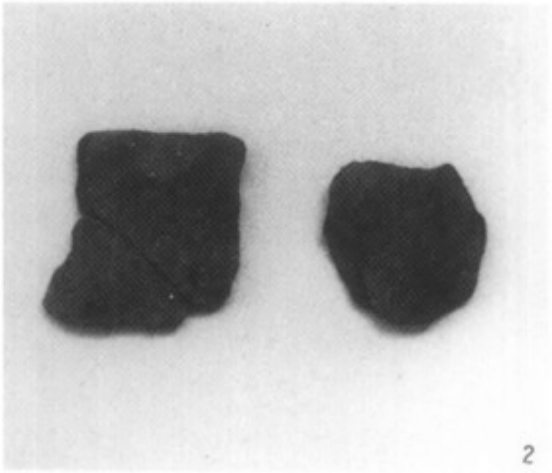


弥生土器（4）

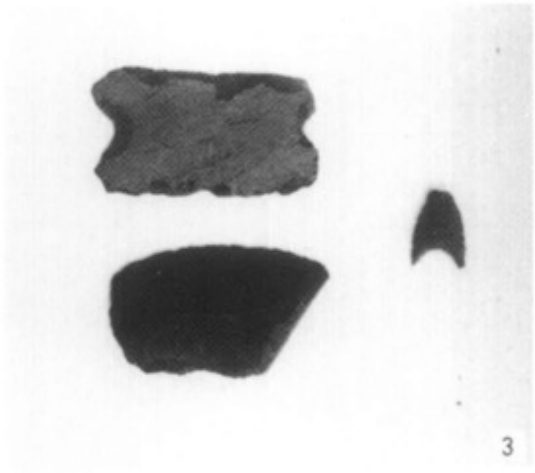
図版11



1



2



3

1 土鍋脚部
2 押型文土器
3 打製石庖丁・石鏃
4 敲石・磨石

4

中世土器・縄文土器・石器

中寺廃寺確認調査概報

例　　言

1．本書は，琴南町造田に所在する中寺(なかでら)廃寺の確認調査概報である。

2．調査は，琴南町教育委員会と香川県教育委員会の共催により実施した。発掘調査は，町教育委員会社会教育主事宮地隆と県教育委員会文化行政課技師中西昇が担当した。(職名はいずれも昭和59年度調査当時のものである。)

発掘調査に従事した人々…小山稔，川田多組，小笠原国正，岡坂トモエ，伊賀ミツノ，西尾芳子，西尾ハル子，西尾幸子，小山美智代，堀田兼雄

3．本書の執筆・編集は中西が担当した。

4．遺構・遺物の実測図は現在香川県埋蔵文化財センター，出土遺物は町教育委員会において保管している。

5，調査にあたっては，町建設課職員の協力を得たほか，概報作成を含めた全般にわたって町誌編纂委員伊賀正法氏，県文化行政課渡部明夫，大山真充両氏をはじめ職員諸氏の御指導・御教示を得た。記して感謝いたします。

目　　次

第1章　立地と歴史的環境……49
第2章　調査に至る経緯……51
第3章　調査の概要……52
　1　第3テラスの遺構……52
　2　心礎下部遺構……57
　3　第1テラス……57
　4　第2テラス……57
　5　第4テラス……59
　6　出土遺物について……59
第4章　まとめ……62

挿　図　目　次

第1図　中寺廃寺周辺地形図……49
第2図　桜の窪遺跡出土土器実測図……50
第3図　第3テラス発掘調査作業風景……52
第4図　第3テラス地形略測図及びトレンチ配置図……52
第5図　トレンチ土層図……53
第6図　塔跡礎石平面図……55～56
第7図　心礎下部遺構平面図……58
第8図　第2テラス地形略測図……59
第9図　中寺廃寺出土土器実測図……60
第10図　須恵器壺No.5底面ヘラ記号……61
第11図　中寺廃寺出土鉄製品実測図……61
第12図　詫間町大浜遺跡出土須恵器実測図……62

図　版　目　次

図版1(1)　中寺廃寺遠景……65
　(2)　第3テラス塔跡礎石検出状況……65
図版2(1)　北西端礎石……66
　(2)　北東端礎石……66
図版3(1)　心礎東側の配石遺構……67
　(2)　心礎下部須恵器検出状況……67
図版4(1)　心礎下部須恵器検出状況……68
　(2)　心礎除去後の状況……68
図版5(1)　心礎下遺構及び土器群検出状況……69
　(2)　心礎下土器群……69
図版6(1)　心礎下土坑……70
　(2)　完掘時全景……70
図版7(1)　第2テラスから第3テラスを遠望……71
　(2)　第4テラス……71
図版8　中寺廃寺出土須恵器……72
図版9　中寺廃寺出土須恵器・土師器・鉄製品……73

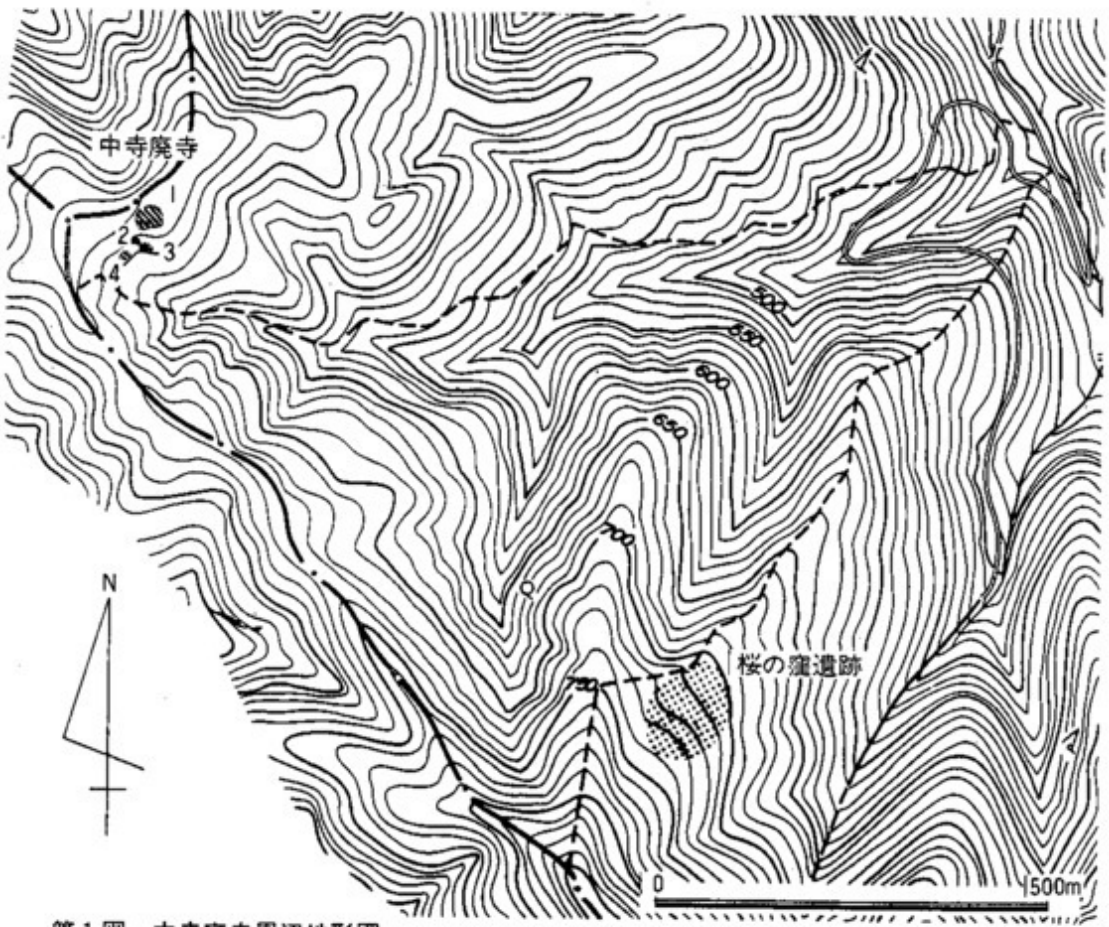
第１章　立地と歴史的環境

中寺廃寺は、讃岐山脈中第２の高峰大山山（標高1,043ｍ）の西に延びる尾根からさらに北西に分岐する一支脈上の，満濃町・仲南町との境界である三つ頭から東に下る，通称「松地谷」に向かって南面した標高720～730ｍの緩斜面に立地する。大川山から当該地にかけては，土器川の一支流柞野川を形成する数多くの小さい谷が集まり，斜面部も急緩の複雑な様相を呈している。

当該地は，松地谷の最奥部に南面しているため，造田・中通などの土器川本流沿いの集落は尾根を隔てていて望見することができないが，眼前にそびえ立つ大川山を見上げる位置にある。

付近では周知の遺跡は殆ど確認されていない。「末寺」が元と思われる「松地」と呼ばれる当該地以外には，「桜の窪」と呼ばれる一帯（第１図）で土器片が採集されているほかは，「中寺」，「鐘が窪」など中寺廃寺に関連すると思われる伝承をもつ地名が点在する程度である。

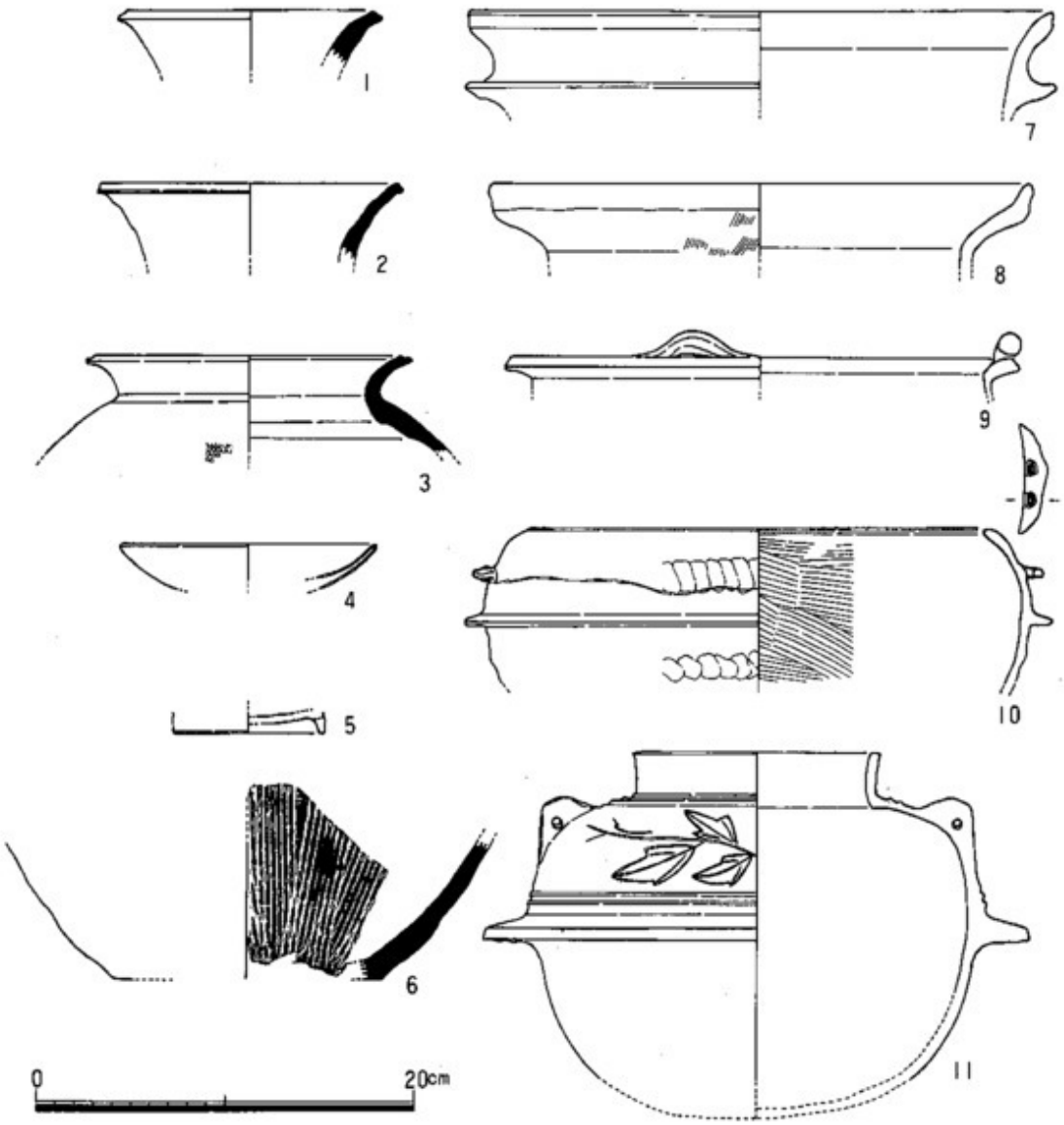
桜の窪遺跡は，大川山の北西約1.7kmの北東向き緩斜面（標高700～720ｍ）に立地する。現在は国有林として杉が植林されているが，以前は地名どおり桜の木が多かったという。この緩斜面一帯から採集される土器は，中～近世の土師質土器が最も多く，他に須恵器，備前焼を含む中～近



第１図　中寺廃寺周辺地形図

世陶磁器等も見られる。第２図１～３は須恵器である。１・２は壺の口縁部と思われる。３は甕である。体部外面には，摩耗が著しいが部分的に格子状叩き目が認められる。４は白磁の椀もしくは皿であろう。５は内面黒色土器の高台である。６は備前焼の擂鉢である。擂目が多条化しており，かなり年代の下るものであろう。７・８は羽釜の口縁部と思われる。９は土鍋である。粘土紐の貼付けによる耳をもつ。10・11は瓦質の羽釜である。10は２孔の耳を１対もつ。内面には粗いハケ目を施している。11はいわゆる茶釜である。体部上半分に１対の耳をもち，型による隆線文の草花が描かれている。１～３・５・７は中世前半，４・６・８～11は近世以降であろう。

これらの遺物から，桜の窪遺跡は中世から近世にかけての複合遺跡と考えられるが，その性格



第２図　桜の窪遺跡出土土器実測図

は，近代以降の一時期の開墾や植林による地形の改変も相まって，検討が困難である。中寺廃寺あるいは大川山信仰に関連があるのかもしれない。

第2章　調査に至る経緯

中寺廃寺に関する文献は殆どない。唯一，「讃岐廻遊記」[註1]にわずかに「中寺」という名称と短い伝承が残されている程度である。

一方，前章でふれた桜の窯遺跡付近から今回の発掘調査地点までの範囲が「中寺」という小字名で呼ばれている。また、町内外の幾つかの寺院に関して，もとは中寺にあったという伝承が門徒の間に残されているという[註2]。

これらのことから，町村合併25周年記念事業の一環としての琴南町誌編纂に伴い，昭和56年11月に伝承地付近で詳細分布調査が実施され，字中寺の西端，「松地」と呼ばれている地点で，数箇所においてテラス状の平坦地が発見され，そこから礎石と思われる露出した石塊が確認されるに至り，にわかに中寺伝承との関連が真憑性をもちはじめた。

そこで，琴南町では町誌編纂事業及び今後の保存措置に関する基礎資料を得るため，香川県教育委員会文化行政課に確認調査を依頼し，昭和59年４月，町教育委員会と県教育委員会の共催により，調査を実施した。調査は同年４月18日から５月15日の実働16日間の日程で行った。

現地では，事前の踏査により，尾根上から南向き斜面にかけての平坦地（第１テラスと仮称）と、同斜面部における３箇所の小規模なテラス状地形（上方から順に第２～第４テラスと仮称）を確認した。伐開とボーリング棒により探査の結果，第２テラスで２間四方，第３テラスで３間四方の建物礎石を確認した。そこで，今回の調査では，当該地がさしあたって開発の影響を受ける可能性がないことと，限られた調査期間という状況を踏まえ，第３テラスにおける礎石群の性格及び遺存状況を確認するためのトレンチ調査に目標を絞って実施した。

註１．進藤政量　「讃岐廻遊記」　寛政11（1799）年に，

中寺　昔し此中寺に行法不思儀の住僧有。飛鉢の法を行ひ，香西の沖へ鐵鉢を浮，中寺にて行ひけるに，迴船と見掛此鉢追懸米を乞。鉢に米満るや否や，其鉢則空中に飛上り，中寺に飛歸りけると也。米を入れされは，彼鐵鉢より火炎燃出，迴船を追かけしと也。依て今俗説に負め催足の急なるを，火はちか付と言習せなり。

と記載されている。

（『香川叢書』第３巻所収．1943年刊）

註2-．琴南町誌編纂委員会・編『琴南町誌』　1986年　1073P

第３章　調査の概要

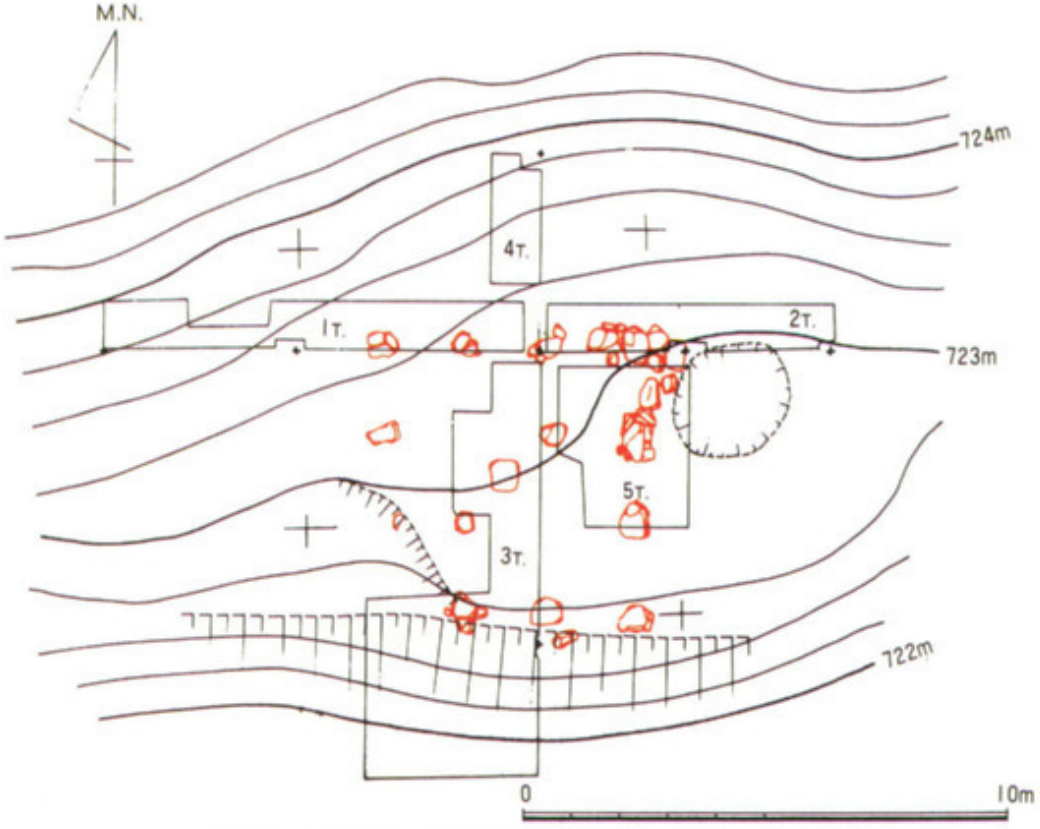
１．第３テラスの遺構　（第４～６図，図版１(2)，２）

第３テラスは標高723ｍ前後の南面する70㎡程度の削平地である。その縁辺部に３個の礎石が東西方向に１列に側面まで露出していた。これらを元にボーリング棒による探査と腐葉土の除去を行い，柱間距離1.8ｍの３間四方，12個の礎石を検出し，さらに中心に心礎を検出するに至った。

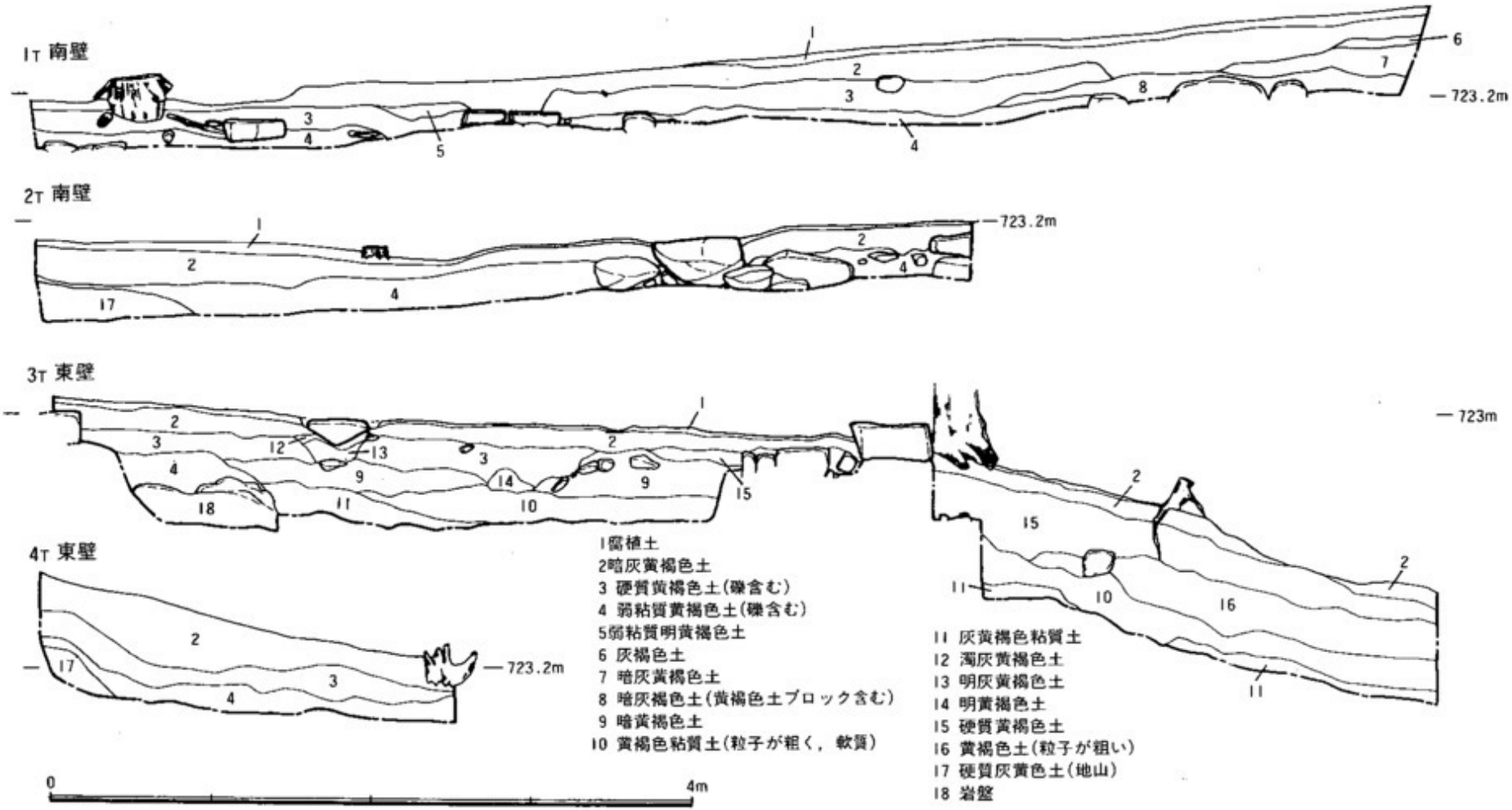
第３図　第３テラス発掘調査作業風景

礎石は安山岩製と思われ，いずれもいびつな形状ではあるが，約40～60cm四方を測る。心礎ほか２～３の石は加工が認められるが，大半は平坦面をもつ自然石と思われる。

主軸はほぼ正確に南北にとっている。北東端には隣接して近代の炭焼窯が築かれていた跡が凹地となって残っているが，その掘り形は幸い遺構には影響を及ぼしていなかった。

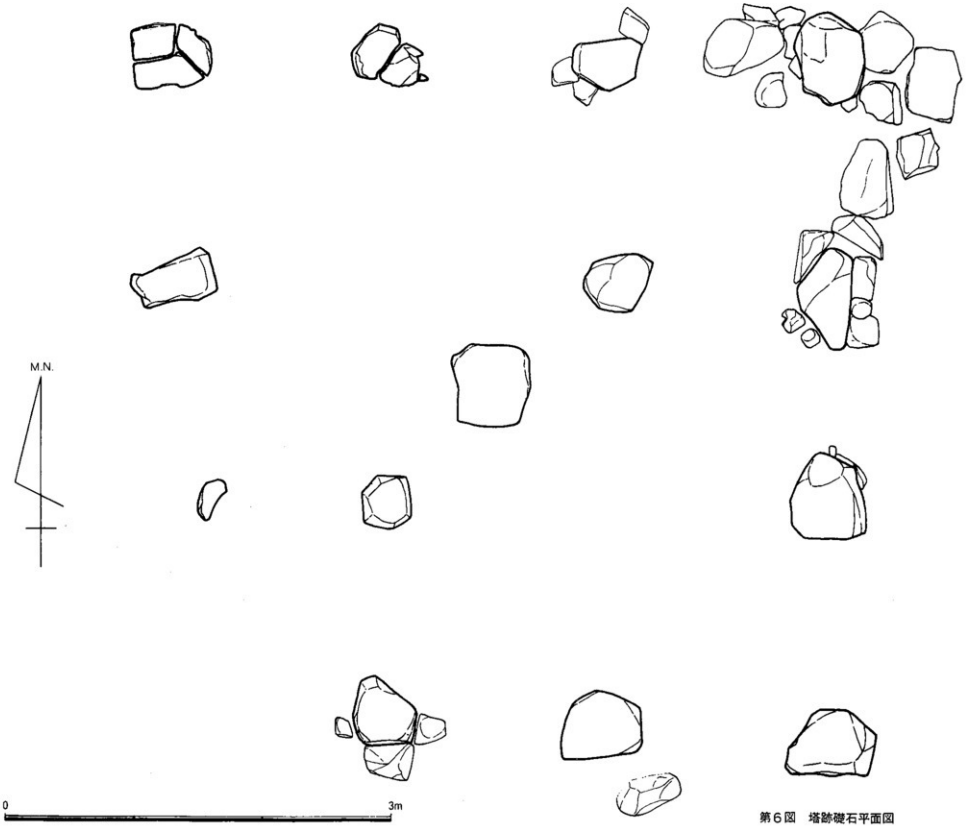


第４図　第３テラス地形略測図及びトレンチ配置図



1 腐植土
2 暗灰黄褐色土
3 硬質黄褐色土(礫含む)
4 弱粘質黄褐色土(礫含む)
5 弱粘質明黄褐色土
6 灰褐色土
7 暗灰黄褐色土
8 暗灰褐色土(黄褐色土ブロック含む)
9 暗黄褐色土
10 黄褐色粘質土(粒子が粗く，軟質)
11 灰黄褐色粘質土
12 濁灰黄褐色土
13 明灰黄褐色土
14 明黄褐色土
15 硬質黄褐色土
16 黄褐色土(粒子が粗い)
17 硬質灰黄色土(地山)
18 岩盤

第5図　トレンチ土層図



第６図　塔跡礎石平面図

南西端の礎石は平坦面の崩落のためか欠落しており，その北隣も根固め石が1個露出しているだけである。また，北西から南東への対角線上の礎石2個を欠いている。ボーリング棒でも認められず，根固め石も確認できなかった。後世抜き取られたか，当初から据えられていなかったのか，検討の余地がある。

北西端の礎石は，地山の岩盤に直接据えられている。一方，北東端及びその西，南両隣の礎石は，下に同規模の石を詰めてレベルと水平面とを一定に保っている。

なお第1～3トレンチからは，礎石列の範囲内において若干の土器片，鉄釘等が出土した。

2．心礎下部遺構（第7図，図版3～6(1)）

心礎は南北辺68cm，東西辺62cmを測り，第3テラスの礎石中最も大きい。中心に孔をもたず，上面は平坦である。

第3トレンチを掘り下げ中，心礎東側で須恵器壺を埋設した配石遺構を検出したことが端緒となって，心礎下部から地鎮・鎮壇具と推察される遺物を伴う土坑を検出した。

心礎直下の土坑は，バラス状の小礫をまばらに敷いた直径約90cm，深さ約25cmの不整円形を呈している。土坑のほぼ中央部で土師器の甕，その北側と西側に2個ずつ須恵器壺を配置し，礎石中心主軸上の土坑南縁辺で土師器坏を裾えていた。さらに，土坑両側には直径15cm程度の石を内径20～25cmの円形に配置した遺構を検出した。東側の配石遺構下からは心礎下のものと同形の須恵器が出土したが西側の配石下は，直径約30cm，深さ5cm程度の浅いピット状の落込みを検出したのみで，遺物は出土しなかった。

3．第1テラス（第1図1）

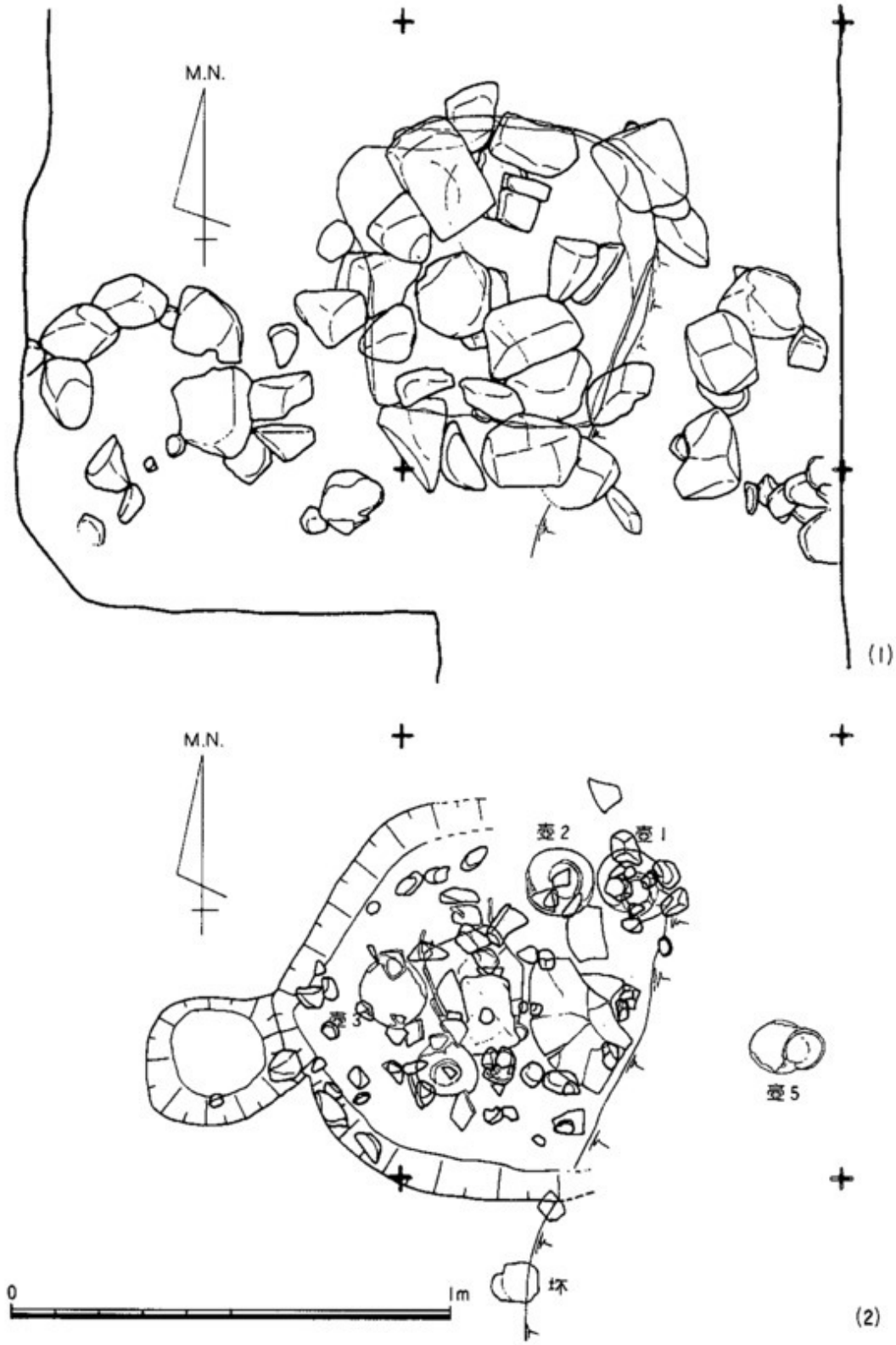
尾根上の第1テラスは最も広く，250㎡以上あると思われるが，やや起伏をもつ平坦地である。ボーリング棒による探査では礎石の存在は確認できなかった。周辺に点在する近代の炭焼窯が築かれる際に礎石が抜き取られたか，もしくは礎石を伴わない掘立柱建物が存在するのかもしれない。

調査中，土師器坏底部を採集した（第9図11）。摩耗が著しく，年代の決め手を欠く。

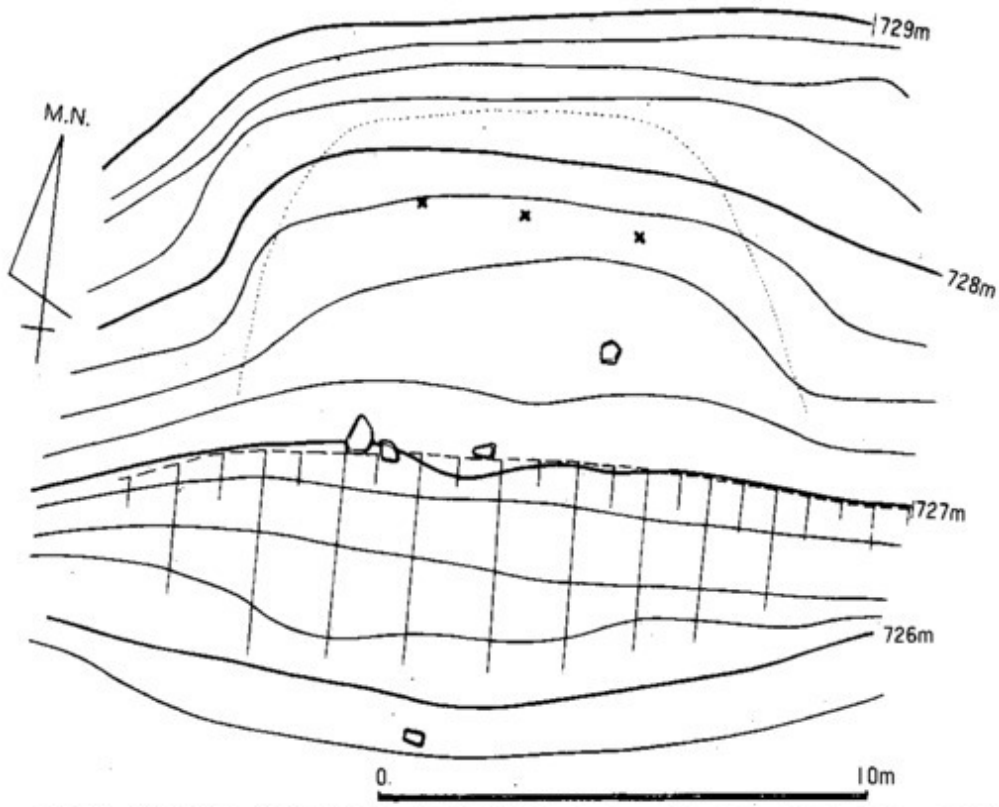
4．第2テラス（第8図，図版7(1)）

約40㎡のテラス状遺構である。第3テラス同様に南面しており，その縁辺部に1辺40～50cmの礎石が柱間距離約2.3mをおいて2個露出している。さらにその東2.3m先には，根固め石と思われる拳大の石塊があり，その5mほど下方には，前記の礎石とほぼ同じ大きさの平坦面をもつ石があることから，本来の位置から流れ落ちたものと思われる。また，この拳大の根固め石の北隣でも礎石が露出しており，その奥にも東西に3個並んでいることがボーリング棒で確認できた。

以上のことから，第2テラスでは2.3m間隔の2間四方の礎石建物遺構が存在することが確認さ



第7図　心礎下部遺構平面図(1) (2)



第8図　第2テラス地形略測図　（×記号部分はボーリング棒により，礎石を確認した地点）

れた。

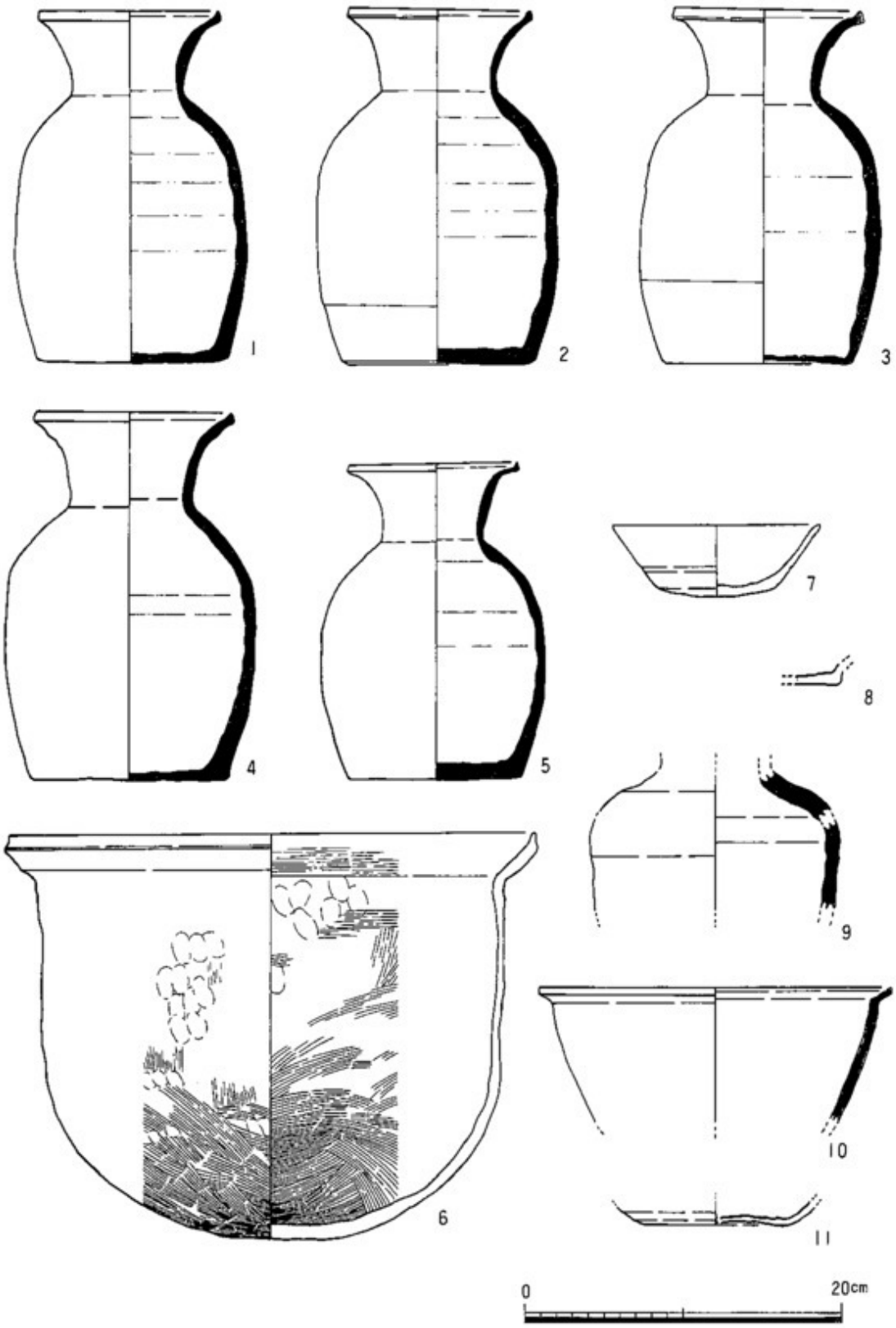
5．第4テラス（図版7 (2)）

第4テラスは最も低い位置にあり，しかも浅い谷の最奥部に立地している。約100㎡の平坦地のほぼ中央に人頭大の石塊が10数個集められている。礎石は確認できなかったが，下方の斜面に4個ほど礎石と思われる平坦面をもつ石が点在していることから，立地上後世に土砂と共に流されたものと推察される。

6．出土遺物について（第9～11図）

第9図1～7が心礎下及び心礎に付随した遺構から出土した土器である。

1～5・9・10が須恵器である。そのうち，1・2が6の甕の北側，3・4が西側，5が東に隣接した配石遺構から出土した。細部に多少の差異は見られるが，いずれも平底で，体部は丸みをもって立ち上がる。体部は回転ヘラケズリ（右回り）の上，回転ナデ調整が施されている。頸部はゆるく外反しながら立ち上がり，口縁端部は上方につまみ上げられている。底部はヘラ切りによる。なお5には極めて細いヘラ記号が刻まれている（第10図）。一方は抽象的な記号のようで

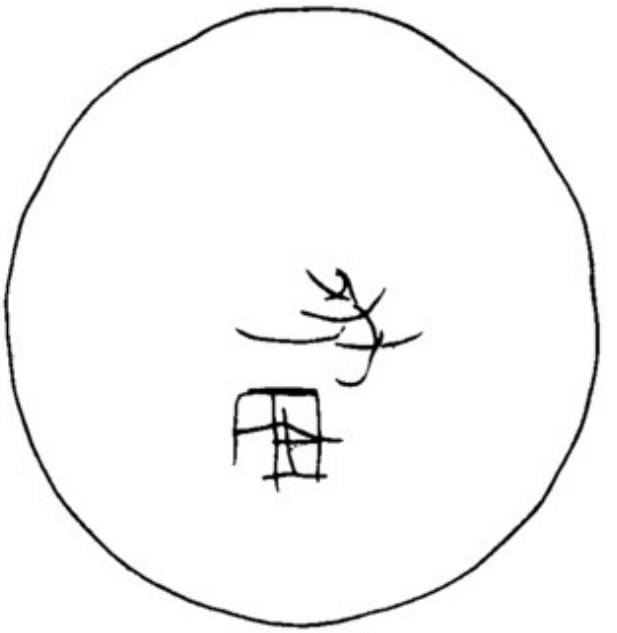


第９図　中寺廃寺出土土器実測図

あるが，もう一方は「囲」という漢字に見える。ただ，切り合い関係から「囲」の一般的な筆順と異なるため，検討の余地があろう。

1～5は，ともに淡橙褐色を呈し，軟質で土師質的な焼成である。

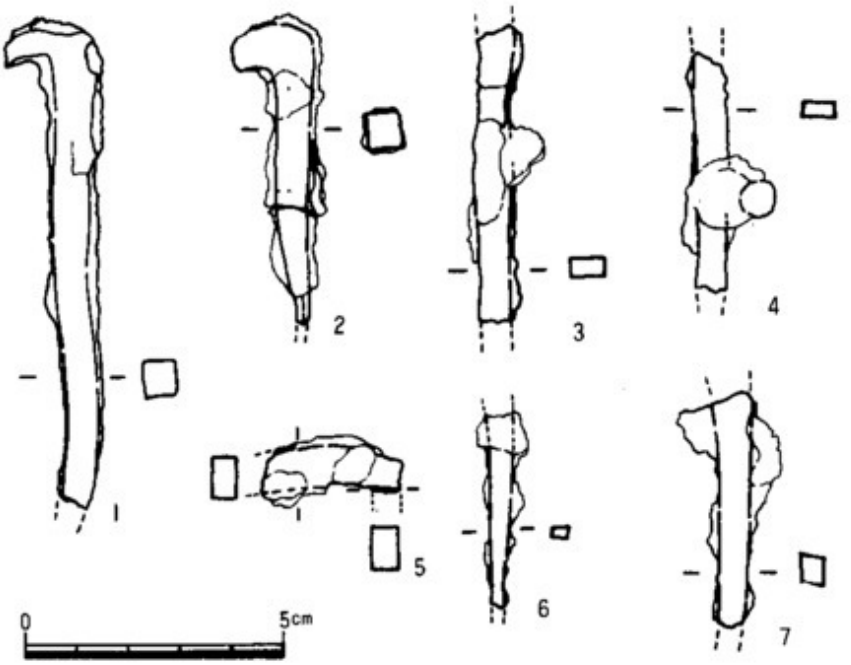
6は土師器の甕である。口径33cm，器高25.5cmを測る。口縁部はゆるく外反した後，わずかに肥厚し，端部は細くつまみ上げられている。口縁部内面はヨコハケ，体部内外面には指頭痕を明瞭に残す。底部は内外面ともにていねいなハケ調整が施されている。



第10図　須恵器壺5底面ヘラ記号（縮尺$\frac{3}{4}$）

7は土師器の坏である。体部は内外面ともにヨコナデ，底部はヘラ切りによる。

8～10及び第11図の鉄釘はトレンチ出土の遺物である。8は土師質の坏もしくは皿と思われるが，小片のため，径を復原できない。9は須恵器の壺である。外面に暗緑色の自然釉がかかる。10は須恵器の鉢と思われる。口縁部は外反し，わずかに上方に拡張する。



第11図　中寺廃寺出土鉄製品実測図

第11図の鉄釘は，1・2・7のように断面が正方形のものと，それ以外のように長方形を呈するものとがある。1・2は倒L字状に折り曲げた頭部をもつ。5は鎹であろう。

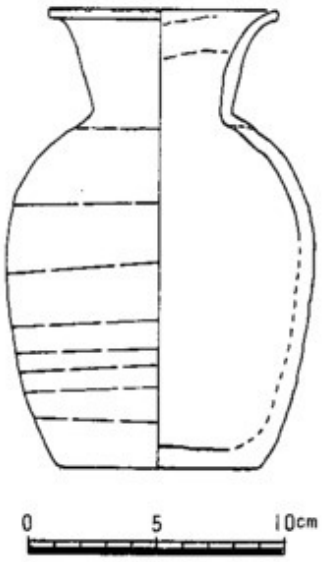
他に土師質の小皿，内面黒色の土師器が出土しているが，いずれも実測不可能な細片である。

第4章　まとめ

中寺廃寺は，寛政11（1799）年に書かれた『讃岐廻遊記』[註1]に寺名が見られ，他は地元の伝承と調査地の「中寺」という字名のみ残された廃寺である。

今回は確認調査という短期間で制約の多い調査ではあったが，予想を上回る成果を上げることができた。

まず，「中寺」と呼ばれる小字の範囲内で，尾根から谷に至る斜面に4箇所のテラス状平坦地と，そのうち2箇所から礎石建物を1棟ずつ確認した。1棟は柱間距離約2.3mの2間四方，もう1棟は約1.8m間隔の心礎を伴う3間四方の塔跡と思われる建物である。隣接する2地点の建物の柱間距離は異なるが主軸方向はいずれも南北にとっており，企画性のあることが窺える。将来において，再度調査する機会を得た時点で，塔の位置をもとに寺域内の伽藍配置を検討したい。



第12図　詫間町大浜遺跡出土須恵器実測図

第3テラスにおいて確認された塔跡の心礎の下部からは，いわゆる地鎮・鎮壇具と考えられる遺物を伴う遺構を検出することができた。土坑の中央に甕を据え，壺を2個ずつ北側と西側に並べ，正面に坏を配置していた。また，土坑の東西隣からは輪状の配石を検出した。東側の配石下からは壺が出土したが，西側の配石下は浅い落込みだけであった。本来何らかの供物が置かれていたものと推察される。

このように，ここでは輪宝，橛などによる一般的な地鎮・鎮壇具の埋納状況とは異なっており，今後の地鎮・鎮壇作法の類例の増加を期待したい。

最後に，中寺廃寺における塔の建立の時期について述べる。

塔建立の年代を検討する遺物としては，前述の心礎下の地鎮・鎮壇具として用いられた土器のセットがあげられる。5点出土した須恵器壺は，県下では出土例の極めて少ないタイプである。最も近似しているのは，縄文時代後期の遺跡として知られている大浜遺跡[註2]出土の壺（第12図）である。口縁端部のつまみ上げが見られないほかは，ほぼ同形と言ってよい。焼成は一般的な青灰色の良好なものである。ただこれは攪乱層からの出土であり，年代を比定できる手がかりを持ち

得ない。

比較的類似している例として，9世紀中葉とされる平安宮内裏・遺構[註3]83出土の壺や，9世紀後半とされる平安京右京一条三坊九町ＳＧ[註4]177Ｂ，北野廃寺（第9次）ＳＫ[註5]18一括の壺があげられるが，これらはいずれも高台状に外方へ踏張る底部をもつ。

これらに後出するものは，平安京左京八条三坊ＳＤ[註6]29C出土の壺136のように外方への踏張りが消え，垂直に下りる傾向を示す。中寺廃寺の，特に壺4はこれに近似する特徴をもっている。このＳＤ29Ｃの年代を報告書では，一部に新しい要素をもつ遺物が共伴していることから10世紀前半から中葉と幅をもたせている。また宇野隆夫氏はこの壺136を，10世紀を3期に分割した初めの1期に位置づけて[註7]いる。これらの年代観から，中寺廃寺出土須恵器壺の年代をとりあえず10世紀前半と考えた[註8]い。また甕についても，比較的類似した特徴をもつと思われる平安京右京一条三坊九町ＳＫ[註9]131出土甕を，伴出した黒色土器の鉢から10世紀前半としていることから，ほぼ同時期の所産と考える。

中寺廃寺，少なくとも第3テラスの塔は，存続及び廃絶の時期を示す遺物が出土していないものの，埋納された地鎮・鎮壇具の年代から，10世紀前半に建立され，『讃岐廻遊記』の書かれた18世紀末には既に伝承しか残されていない状態になっていたということが推察される。

今回の調査では，かなり広範囲にわたると思われる寺域のうちのごく一部で遺構を検出したに過ぎず，隣接した他のテラス状遺構の性格や伽藍配置の検討にまで及ぶ調査ができなかった。

本県における山岳寺院の発掘調査は，隣接する仲南町尾ノ背廃寺で実施[註10]されたのみで，全国的にみても調査例が増加しつつあるが，まだ多いとは言えない。またその大半が中世寺院であり，山岳仏教草創期に近いと考えられる平安時代中期にまで遡る山岳寺院の調査例は極めて少ないと言え[註11]よう。その意味で，中寺廃寺の「創建」年代，地鎮・鎮壇具の検討，存続時期が重複しているであろう桜の窯遺跡や尾ノ背廃寺との関係等，今後に残された課題は多い。

今後，更に調査を重ねることによって，『讃岐廻遊記』中の「中寺」との同一性の検討を含め，中寺廃寺の全容が明らかになることを期待したい。

註1　第1章註1参照

註2　伊沢鑒一・森本義臣　『大浜遺跡調査概要』　詫間町教育委員会　1981．3

註3　梅川光隆　「平安宮内裏」『平安京跡発掘調査概報　昭和60年度』　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所　1986．3

註4　平良泰久他　「平安京跡（右京一条三坊九・十町）昭和55年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1981－1）』　京都府教育委員会　1981．3

註5　堀内明博　『北野廃寺発掘調査概報（昭和57年度）』　京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所　1983．3

註6　吉川義彦　『平安京左京八条三坊　京都市埋蔵文化財研究所調査報告』（第6冊）㈶京都市埋蔵文化財研究所　1982．3

註7　宇野隆夫　「後半期の須恵器――平安京・京都出土品にみる中世的様相の形成――」『史林』第67巻6号　1984．11

註8　廣瀬常雄　「すべっと2・4号窯」『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和57年度』香川県教育委員会　1983．8

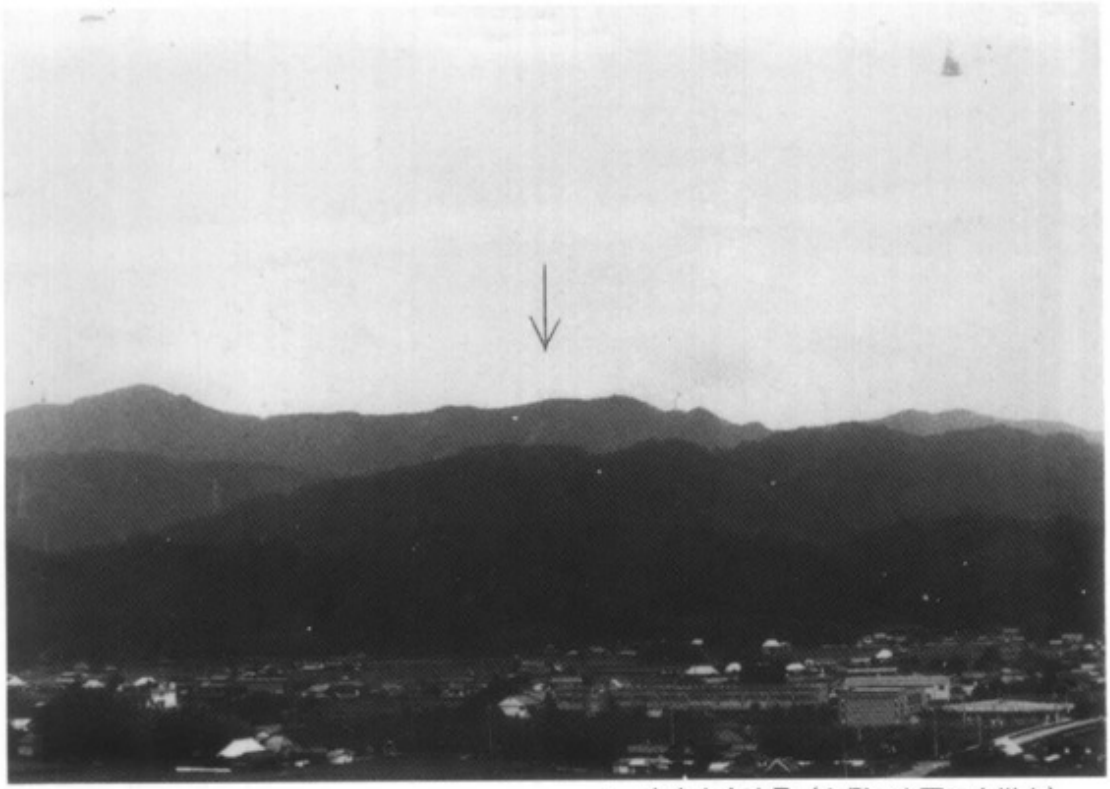
綾南町陶窯跡群中の上記すべっと2号窯跡から，やや体部の比率が大きいものの底部の形状を含めたプロポーションが近似した壺が出土しており，調査者は10世紀以前としているため，更に考慮する余地はある。

註9　註3に同じ

註10　伊沢鑒一・斉藤賢一　『尾ノ背寺跡発掘調査概要(Ⅰ)』仲南町教育委員会　1980．3

註11　近県では，平安時代初期とされる広島県府中市所在青目寺跡が知られている。

豊元国他　『青目寺跡の調査報告』広島県立府中高等学校生徒会地歴部　1968



1. 中寺廃寺遠景（左側の山頂は大川山）

2. 第３テラス塔跡礎石検出状況

図版2

1. 北西端礎石

2. 北東端礎石

1. 心礎東側の配石遺構

2. 心礎下部須恵器検出状況

図版4

1. 心礎下部須恵器検出状況

2. 心礎除去後の状況

1. 心礎下遺構及び土器群検出状況

2. 心礎下土器群

図版6

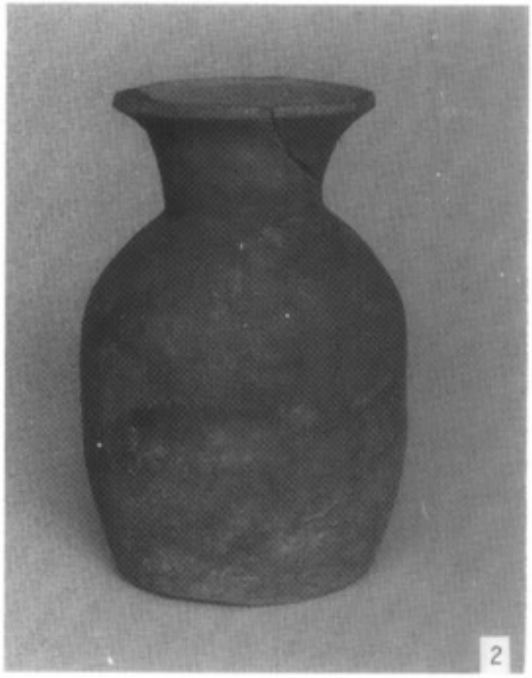
1. 心礎下土坑

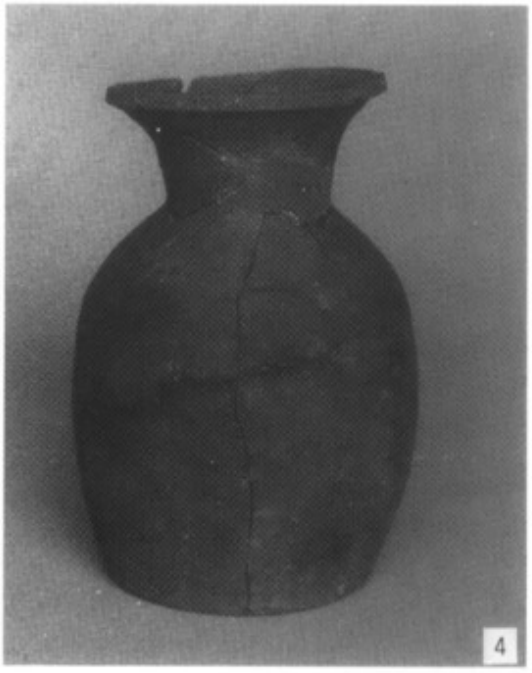
2. 究掘時全景

1. 第2テラスから第3テラスを遠望

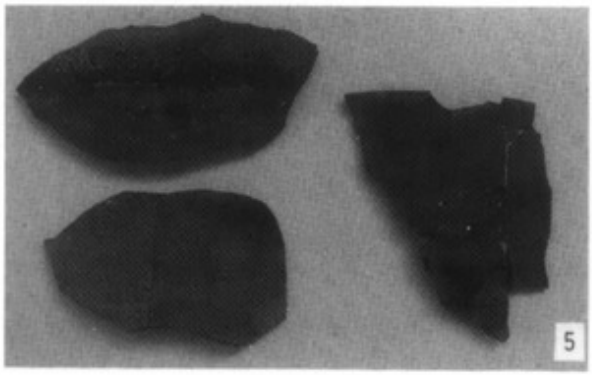
2. 第4テラス

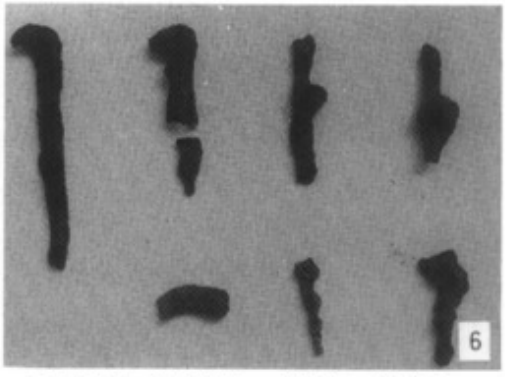
図版8





中寺廃寺出土須恵器





中寺廃寺出土須恵器・土師器・鉄製品